
魔法少女リリカルなのはR e w r i t e

由真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはRewrite

【Nコード】

N6751Z

【作者名】

由真

【あらすじ】

もはや敵なしと云われるほどの実力者、氷上京谷は高町なのとはある違法研究施設に突撃をかけようとしていた。そこで出会ったのは一人の生きる意味を知らずに人間兵器にされかけた少年。

京谷はその少年を助け、自分の仲間に取り込むことにしたのだった。
。。。

それから二年後、時空管理局局長堂本奏のもとナイトオブブラウズ

のメンバーの一人となった一騎は壮大な戦いに巻き込まれていく!?

その剣は誰を守るために、その意志は何を変えるために。

魔法少女リリカルなのは Rewrite、始まります。

お知らせ

この作品はEエブリスタ（現在非公開）で掲載していた私同名小説の前の時間軸の話になります。また、そのサイトで掲載していた内容も後々掲載するのでご了承ください。

この作品はリリカルなのはシリーズの二次創作です。

また、一部原作とは異なる設定がありますが、あくまでこの話のことであり、原作とは一切関係ありません。

R e w r i t e 0 : 若き剣士(前書き)

一騎「始まったな・・・」

京谷「ああ。つか許可とって10か月くらいほっといて今更再始動つてのもなかなかいい加減だぞ」

作者「面目ない・・・。だって仕事もいそがしいし」

一騎「まあ、いいか。んじゃ、始まるぞ」

R e w r i t e 0 : 若き剣士

「味方の損害率、70%突破!!」

「第五防衛ライン崩壊します!!」

「第104部隊から援軍要請が．．．!!」

「ぐう、何故だ!!なぜ我が国がこうも簡単に圧されてしまっているのだ!？」

総指揮官であろう男は非常に焦った顔をしていた。今この世界では戦争が起きている。この国と近隣の小さな国。

無論圧倒的に、今やられている側の国の方が圧倒的な軍事力を持っている。なのに何故非常に不利な状況にいるのか。

それは．．．小国側に最強の戦士達が味方にいたからだ。

「スターダスト・フレア星屑の咆哮ッ!!」

そう叫んだ俺の仲間の一人、星川さららの放った砲撃がフィールドを張っているにも関わらず、再び複数の機械魔神をいとも簡単に打ち抜く。

当たり前だ、魔法とビームじゃ組成が違う。混乱するのも無理はない。

「メテオ・インパクト隕石の衝撃ッ!!」

別の方向ではさららの双子の姉、星川きららが同じく機械魔神をぶっ壊していた。

二人ともまだ10歳なのになかなか出来るやつだ。

さて、俺も動かないと敵にロックされてんな。
前方に六機．．．いずれも中距離戦闘用か。向こうさんは、俺を見
つけるや否やマシンガンを撃ちながら突撃してくる。
が、焦っているのか狙いが甘いし統率もとれていない。

ならば、隊長機を先に落としておくか。

俺は自分の刀の一本、白龍を抜いて敵の動きを注視する。そして、
隊長機が俺の射程に入った。

「ドラゴン．．．スレイヴッ！」

俺は刀に淡い黄色の光を纏わせ、薙ぎ払う。刹那、刀から三日月状
の剣撃が放たれ隊長機を引き裂き撃墜する。

隊長機が落とされ、残りの機体の統率がさらに悪くなる。それを読
み取った俺は一気に距離を詰め、すり抜け様に二機の腹を引き裂く。
そして爆発、さらに誘爆して二機を落とす。

そして残りの一機は苦し紛れにマシンガンを乱射してきた。が、そ
んな甘い照準で俺が当たるわけではない。

反転した俺はそのまま、コックピットに刀を突き刺す。
誘爆状態に入ってからすぐに抜いて、上空へ避難した。その直後、
それが爆発した。

俺が一息突いた後、シオンから通信が入る。

「シオンさんか」

『どうやら最終兵器が出たようです。反応の情報を転送します』

そして程無くそのデータが送られてくる。ふむ、オールレンジ攻撃
とマルチロック攻撃が出来る高機動の機体か。
成る程、すこしは骨がありそうだ。

「じゃあシオンさん、要塞破壊の攻撃お願いしていいですか」
『わかりました。では、五分で片付けてくださいね』

「まったく、シオンもしれつとすごい要求をしやがる。何て言っている間に敵は俺目掛けて突っ込み、俺をビームソードで斬りつけようとする。」

俺はそれを刀で裁き、難なく切り刻んだ。
すると、遙か後方から高火力のビーム砲が飛んでくる。
虚を突かれたがなんとか回避し、飛んできた方角を見た。

そこには、蒼い翼を讃えた神々しい機械魔神がいた。
それは他とは圧倒的に違う速さで迫ってくる。

「ちっ」

俺は、刀を構え直し敵の攻撃に構える。敵は二刀流のビームソードを抜き薙ぎ払うように突撃してくる。

その脇をなんとかすり抜けて、反転する。

射撃は得意じゃねえが仕方がねえ。

俺は、刀を握ってない手に魔力を込めて無言詠唱する。

そして振り返った刹那に誘導射撃魔法”アルテミス”を放った。
魔方陣の周囲に幾多の光の珠が浮かび、すぐに敵目掛けて光が駆ける。

そしてすぐに、突きの構えをして突貫。
アルテミスが直撃した直後に、白龍が敵を捉える。確実に落とした
と思ったが違った。

爆発の煙が晴れたとき、敵はしっかりとシールド防御をしていた。そしてシールドを左に振り払い、レールガンに至近距離で発射するが、遅い。俺は振り飛ばされる力を利用して後ろに回り込んでいた。そして、左の翼を斬り落とし爆発。敵はバランスを崩した。

あと2分か・・・

残り時間を確認して、敵の正面から斬り結ぶことを選び、旋回しながら迫る。相手も律儀にそれに合わせてきた。

俺はあらかじめ左手に光波シールドを精製しておいた。なぜか？直ぐに解るさ。

そして真っ正面から斬り結ぶ。俺の刀は相手のシールドを捉え、相手のビームソードは俺のシールドを捉えた。

さすが最強の機械魔神。出力が違うな。だけど・・・終わりだ。

俺は左手に一瞬だけ力を込め、ビームソードを押し退ける。そして直ぐ様もうひとつの刀、”黒龍”を逆手で抜きそのまま右腕を斬り落としした。

あとは簡単、黒龍を手で回して正しく持ち返し刃で右脚、白龍で左脚、そしてクロスで両腕を斬り落としした。

ついでなので、アルテミスで羽と頭を頂く。

バランスを失った相手は為す術なく地上へ落下していった。

そして、一息ついて辺りを見回すときさらさらがほぼ制圧していた。ある意味なのはたちよりタチが悪いな・・・。

「シオンさん、終わりました」

『解りました。では、全員を下げてください』

「了解。全員に告ぐ！！直ぐに撤退だ！！」

俺は、前線に向かっていている連中に下がるように告げて、自身も安全圏へ下がった。

そして、シオンが自身のインテリジェントデバイス”アイシクルエツジ”を構え、魔法の詠唱を始める。

「極地に集いし白銀の光．．．消せぬ輝きを纏い、闇を払う剣となれ．．．ダイヤモンドブリザードッ！！」

唱えた瞬間、射線軸に七つの魔方陣が浮かぶ。そして翳された手から、青白い砲撃が放たれた。

青白い光が魔方陣を通過する度に速く、強力になる。最後の魔法陣を通過した時、放たれた時の大きさより何倍も大きい光となって、要塞へ向かって走っていった。

フリーダム
「自由”、反応ロスト！！」

「敵、全軍撤退していきます！！」

「なに！？なにをするつもりだ．．．」

総指揮官はまさかの事態に焦りの顔しか浮かべられない。そして、何気なく前線に顔を向けるところからへ飛んでくる一条の光を発見した。

「な．．．！！」

「う．．．うわああ！！」

「に、逃げろ！！」

本能的に死を予感した兵士たちは我先にと逃げ出し始める。しかし、その頃には到達し要塞を巨大な冰山へと変貌させていた。

俺とシオン、きらら&さららがレジスタンスたちのキャン
プに降り立つと、戦線に出ていた人達たちが歓喜の声で迎えてくれ
た。

「ありがとうございます!!」

「すげえな兄ちゃんら!!」

「助かりました...!!」

各々から感謝の言葉を述べられる。中には感極まって泣き出す人も
いた。きらら&さららの幼女コンビはおっさんたちに肩車
されたり手荒く頭を撫でられたりされ、喜ぶ一方で笑顔を浮かべて
る。

「いえ、俺達は少しだけ力添えしただけですよ」

俺はというと、レジスタンスの代表に謙遜の言葉を返していた。
そりゃ当たり前だろう、社交辞令だ。まあ...俺がそういう人間
だからだろうからな。

ふむ、シオンが疑いの目を向けていることはスルーしよう。

「一騎、そろそろ帰還せねば...」

「ん、そうか...さらら、きらら!!」

「はいっ」

「うんっ」

シオンに催促されて、俺はきらら&さららを呼ぶ。四人が
近くに集まったのを確認してシオンが転送ゲートを開いた。

魔力の突風が俺達を包み、俺達が元々いた世界に引きずり込むよう

にまとわりつく。

その異様な光景に、みんなは呆然としていたが、やがて一人が駆け寄りながら叫んだ。

「教えてください！！あなたたちは何者なんですか！？」

まあ気持ちは分かるよ。だから、教えた。

「俺達は……」ナイトオブドラゴンズ「円卓の騎士」さ」

R e w r i t e o : 若き剣士（後書き）

京谷「すくねえなオイ。やる気あんのか」

一騎「いやプロローグだし」

京谷「書いた当時作品知らなくていきなり原作崩壊してたな」

一騎「それはまあ・・・しかたない。こんなでも読んでくれた人は出演依頼すごかったしな」

京谷「全員は？」

一騎「さすがに無理らしい」

京谷「一人で20人くらいよこしてたしな。っと、そろそろ」

一騎「こんな小説を読んでくれた方には大感謝を。それだはまた次回」

R e w r i t e 1 : k n i g h t o f r o u n d

そうして俺達は管理局のある世界の自分たちの部隊、ナイトオブ
ウンズの隊舎に帰還した。

思ったよりも早く済んで助かったところだ。

「おかえり一騎、シオン、きらら、さらら」

「おかえりです」

「はい、ただいま戻りました」

「貴方もだ、京谷さん」

「ただいま、京谷さん、フィオネ」

「ただいまです」

管理局局長直轄特務部隊、”ナイトオブブラウズ”隊長、氷上京谷^{ひかみぎょうせ}
さんとユニゾンデバイスであるフィオネに出迎えられ、四者四様の
挨拶を返す。

京谷さんもバリアジャケツトモードのままである辺り、また訓練や
らなんやらしてたのだらう。フィオネも大きくなつたままだ。

さて、この京谷さん^{ザ・クリエイト}宝具生成、異能再現という反則的レアスキルを
所持している。そして己の魔力もEXというとてもない量を保有
しているため管理局で倒せるやつは居ないんじゃないかというくら
い強い。本気を出せば本人曰く、”星の五つや六つ簡単に消せる”
らしい。

誰かこいつを倒せるってやつは前へ出るんだ。

こつちのオレンジ頭の人はフィオネ。京谷さんのユニゾンデバイス
なんだが、単騎でなのはと張り合っていたことがあった。あのリン
カーコアがあつてこの融合騎ありといった感じだな。

「まだみんなは帰ってねえよ。ゆっくりロビーで休んでな。時間まではまだあるからさ」

「『『『はいつ』『』『』」

京谷さんの指示を聞いた俺達はとりあえず隊舎のロビーに向かう。隊舎は京谷さんの趣味なのか、妙にアットホームな感じがする。

「では私は支度してきますね」

と、シオンはそういい残して自室に帰った。

じゃあ俺はなんか飲むもの飲むかな。

「なんか飲むか、さららにさらら」

「あたしジンジャーエール」

「私は．．．イチゴラテで．．．」

準備の早いやつだ、と俺はちっこい姉妹を見ながら思う。とりあえず、頼まれた飲み物を買ってやった。飲み物を受け取った二人は嬉しそうに飲んでいた。その辺りは普通の少女だなと俺は思う。そんなじよそこらの小学校ならモテるのだろうが、まあ．．．戦ってるときの表情は見せたくないな。特にさらら。

「あ、一騎さんなんか失礼なこと考えたでしょ」

「気のせいさ」

ちっ、さすがさらら。近接戦闘を生業とするやつは違うな。

まあそんなことはさておき、俺はアーモンドチョコ珈琲を買って一口啜る。うむ、いつもながら上手い。ささやかなチョコの旨味がコーヒーとマッチして最高の味を引き出している。

「一騎さんっていつもその「コーヒー」飲んでますよね？」

ふと目を俺の手に向けたさらさらが質問してくる。

「ああ、はじめて飲んだときうまくてな」

「そうなんですか・・・」

「なんだかんだで適当なんだね、一騎さん」

「うっせ」

そんな他愛のない会話をしながら、談笑する。

すると、二階から誰かが降りてくるのが捉えられた。

「ありゃ、一騎くんたち帰ってたんだ」

「ああ、ただいま命」

「おかえり きららとさららもね」

「ただいまっ」

「ただいまです」

降りてきたのは同じくナイツオブ라운ズのメンバー、つきしろみこと月城命だ。

槍型のデバイス”オベリスク”を駆る近代ベルカ式で、陸戦AA+の桜塵おつじんの騎士である。槍を扱わせれば一級品で、”竜騎士”の異名で呼ばれる事もあった。

「今日のはあんまし怪我ないね？一騎くんも成長したか」

そう言ってくすくす笑う命。一応命の方がひとつ年上だが何故か年上な雰囲気を持ち合わせていない。スタイルは大人なのだが・・・。

「そっぴやさ、午後から何があるかは知ってるよね？」

「ああ、アースラに隊長と俺と優希、希来が派遣されるアレだろ？」

「いったいなにが・・・」

「そうですね。アースラにはフェイトさんやなのはさんが居ますし、なによりクロノさんとかも・・・」

さらにも同じことを考えたようで、はたと首をかしげたがそれは空中で霧散した。気づけば時間だったようで、京谷さんが羽田希来と俺の妹、桜井優希を連れてやってきたからだ。

羽田希来は俺の親友で、ナイツオブラウンスメンバーでもある。自律兵装も組み込まれた機械式の剣”アロндаイト”を駆る近代ベルカ式の陸戦A Aの魔導師だ。俺が知ってる近代ベルカ式の魔導師の中ではかなり射撃が上手い。

変わって優希は俺と同じ数少ない双剣の使い手で、”ルナティック”と”サンライズ”を扱う。ちなみにデバイスなのはルナティックの方だ。近接型にも関わらずミッドチルタ式で、空戦A Aの魔導師だ。なぜミッドチルタ式なのかは、使用する魔法の大半が、射撃や治癒防御魔法で占めているからだ。つまりところ優希は俗に言う魔法戦士なのだ。まあ・・・俺が言えた義理じゃないのだが。

「まだ休憩中だったか？」

と、京谷さん。

「いえ、行くならもう飲み干しますよ」

そう言って、俺はコーヒーを飲み干す。きららとさららはすでに飲み干していた。

「ん、準備できたか？」

「はい。きららとさららはもう少し休憩な。んで終わったらデスクワーク」

「「はいっ」」

俺が指示を飛ばすと二人は元気よく駆けていった。10歳らしく元気なものである。

「そいじゃ行くぞ、一騎、優希、希来」

「「「はいっ」」」

先頭に行く京谷さんに付いていく俺達。そして程無く転送ゲートについた。

「目え閉じてろよ」

そういつて京谷さんは慣れた手つきで詠唱とゲート起動を行い、一瞬にして俺たちは異空間へ飛ばされた。

そして気がつくとあら不思議。俺達は管理局巡航艦”アースラのブリッジにいた。

「あら、もう来たんだなナイツオブラウンスの諸君」

一番最初に声をかけてきたのは、アースラ艦長であるクロノ・ハラオウンだった。隣には言わずと知れたアースオブエース、高町なのはと希代のエースストライカー、フェイト・T・ハラオウンもいた。

「はじめまして、高町なのは二等空尉です」

「はじめまして、フェイト・T・ハラオウン執務官です・・・」

なのはは元気よく、フェイトは真面目に挨拶してきた。もちろんこちらも挨拶をする。

「管理局局長直轄特務部隊ナイツオブラウンス隊長、氷上京谷二等空佐だ。で、こっちが」

「京谷のユニゾンデバイス、フィオネです」

「桜井一騎さくらいかずき二等空尉です」

「桜井優希曹長です」

「羽田希来軍曹です」

「ああ、よろしく四人とも」

挨拶にクロノさんが労いの言葉をかけた。そして、京谷さんが口を開く。

「久しぶり。元気そうで何よりだな、クロノ？」

「ああ、闇の書事件以来か。空佐もご健勝で・・・」

「っと待った。別に階級で呼ばなくていいだろ」

「だけど・・・」

「俺がいいつつうんだからいい。むしろ命令」

「は、はあ・・・」

妙なところでわがままを使う人である。

「じゃあ京谷、再会を喜ぶのはこれほどにして・・・」

「ああ、そうだな。じゃあお前ら、ブリーフィングルームに行くぞ」

「」「」「」「はいつ」「」「」「」

俺達はそうしてブリーフィングルームに向かう。

「ねえ」

なのはが優希に話しかける。

「あ、はい。なんででしょうか．．．？」

「優希ちゃんは訓練とか好きなの？」

「はあ．．．お兄ちゃんにたくさん鍛えられましたからそれなりに
は．．．」

「じゃあさ、私と模擬戦しないかな？」

「ええ!？」

「いいじゃん、優希ちゃんみたいなタイプは初めてだから」

「あう．．．どうしよ、お兄ちゃん．．．」

なのはの熱意に折れそうな優希が俺に救いの手を求める。が、

「頼んだぞ、なのは」

「やたあ!!!」「お兄ちゃん!!」

なのはの喜色満面な声と優希の悲観的な声が重なる。残念だが、優希なのはに教導してもらおうとしよう。そして、俺は誰かの視線に気づく。振り返ると、そこにはフェイトがいた。

俺がぺこりと頭を下げると、フェイトもぺこりと頭を下げた。
んー、いい子だなフェイト。

「あの．．．」

「なに？」

「えと．．．その．．．一騎さんは、おいくつですか？」

「俺か？俺は13だよ。ちなみに優希が11、希来は12な」

「同年なんですね」

まあそういうことになるか。

「えと．．．術式は？」

「近代ベルカだよ。デバイスは．．．アルル!」

俺がその名を呼ぶと、俺の胸の前の空間が湾曲し、そこから俺のユニゾンデバイス、アルテマウエポン^{II}ドゥーエが現れる。
山吹色の髪で片目を髪で隠している。別に何かあるわけじゃない。体はけっこうグラマーだ。

一応女の子のためアルテマウエポンと呼ぶのはあまりに可哀想だと思っ
て、愛称を込めてアルルと呼んでいる。

あ？なんで俺もユニゾンデバイスがいるかって？それはあれだ、
この京谷^{おほか}さんの気まぐれだ。まあいいんだけどな。

「どつたの・・・？」

アルルは寝起きだったようで寝巻き姿のままだった。別に俺の中にいる必要はないが、アルル曰く俺の中は心地よいらしい。

「はやてとおなじなんですネ、一騎さんのデバイス」

「ああ、はやてはリインフォースだったか」

「私はリインちゃんみたいに優秀じゃないんだけどね・・・」

とか言っているが、アルルはリインとは別方向で激しく優秀だ。主に能力強化や防御、回復で進化を發揮する。アルテマウエポンという名前を貰ってるくせにそれもどうかと思うけど。

「じゃあ武器はどうなんですか？京谷さんと同じ？」

「いやいや・・・んなわけあるかよ・・・。俺のはこれだよ」

そう言っ
て、俺は愛用の二振りの刀を取り出す。

「うわぁ・・・」

俺の刀を見て、フェイトは感嘆の声をあげる。俺から白龍を受け取

り、フェイトは一息で抜いた。頭上でくるくると回して刃紋を見てからまた閉まって俺に返す。

「業物なんですね．．．私、刀の事はよく分らないんですが、すごく強そうな感じがします」

「いや、今フェイトが抜いたのはそうでもねえよ」

「え？」

まあ驚くわな。そこへアルルが口を挟む。

「一騎の白龍は不殺の刀っていう異名があるんです。その刀は人を傷つけることが出来ないんですね」

「ええ!？」

「正確には、”斬った斬り傷がすぐに治る”んだ。まあその代わりに痛みは普通に斬ったときより遥かに痛いんだけどね」

「へえー．．．」

フェイトは関心を持って、アルルの話を聞いていた。そうして程なくブリーフィングルームに到着する。

そして戸を開けると、すでに京谷さんとクロノさん、希来、なのは、優希に八神はやてが座っていた。

「あ、はやて」

「フェイトちゃんもきとったんやな。そっちのかつちよええ子とちつこいのは？」

「桜井一騎だ。こっちはアルル」

「よろしくです、はやてさん」

「私は八神はやてや。こっちは．．．」

「ラインフォース?です アルルちゃんからはなんか似た者同士な気がするです」

「うん、私もリインと同じユニゾンデバイスだよ」
「そうなんですかー」

なんかリインとアルルの間に既に固い友情が結ばれたようだ。

「お、来たか。とりあえず座れ」

京谷さんの指示に従い、俺達は各々座る。俺の右にはフェイト、その隣には希来、左にははやてといった具合だ。

「よし、ではブリーフィングを始める。まずはこれを見てくれ」

進行役をするらしいクロノさんは、そう言つとモニターに廃墟に立つ謎の生物の画像が投影された。

「これは・・・?」

と、なのは。

「これは二週間前に第2武装隊が送ってきた最後の映像だな」

「第2つて謎の反応を調査しに行ったところですよね?もしかして第2武装隊つて・・・」

「全滅した可能性が高いな・・・」

優希の疑問に俺が答える。

「せやけど第2ちうたらなんか特化した戦闘のプロが所属するとこやろ?そんな所が何でそう簡単に全滅するんやろか」

「考えられるとするなら古代遺産が絡んでる可能性は高いよね」

「いや、もうひとつあるぞフェイト」

「え？」

フエイトの分析に京谷さんが横槍を入れた。それに対しクロノさんが確かにというふうに頷いた。

「ああ、京谷が三ヶ月前に倒してきたスティルヴのパターンもある」
俺はそれを聞いてそういうこともあったな、と思った。あの時、京谷さんがふらりと出掛けたときに打ち倒した魔物である。

「つまり、明確な意思を持った魔物が闊歩している可能性がある。管理局は危険対象として発見しだい駆逐、という方向で決定している」

「じゃあ俺達はその対策とごみ掃除を請け負えばいいのか？クロノ」
「そういうことだ。だが、データが少なすぎる。後にも先にも現状はこれだけ。ユーノ使って無限書庫ググらせたり管理世界に片っ端からアクセスさせているんだが・・・」

喋るクロノさんの表情を見る限りあまり芳しくないようだ。しかし然り気無くネット用語が言葉に混ざっている辺り流行については行っているようだ。

「だから最近ユーノくん見かけなかったのかあ・・・」

なのはが寂しそうに呟く。ふたりは親友らしいから、話したり一緒にご飯が食べられなくて寂しそうな思いをしているのだろう。そこに京谷さん宛に通信が入る。

「どうした」

『第47管理世界”ガイア”に例の件に関して情報がありました』

「それで？」

『はい、データの魔物がその世界に来ていたようですがなにやら
みおん．．．』と呟いていたそうです』

「『『『『みおん．．．？』『』『』『』」

その場に居合わせた全員が首を傾げた。

「それだけか？」

『ええ、申し訳ありません．．．』

「いいさ、関与したてはそんなもんだろ」

『そうですね．．．では、失礼します』

そうして局員の通信は途絶えた。

「さて、一応ガイアに向かった方がいいか？」

「そうしてくれ、実際に向かつて分かることもある」

「うし、じゃあ今回は俺、一騎、なのは、紫苑で出向こう」

「了解した、出向許可を出す」

どうやら具体的な方向性は決まったようだ。そして京谷さんはすぐさま神月紫苑さんを通信で呼び出した。

『なんじゃ京谷』

「紫苑、今大丈夫か？」

『うむ、出向も終えてつい先程までオンライン麻雀に興じておっ
て』

「そうか、なら今から出撃準備してガイアの管理局基地に向かっ
てくれ」

『了解じゃ。しかし、急に出撃指令などまた穏やかな話ではないの
．．．』

「まあ穏やかな話じゃないな．．．」

『ふむ、ならば10分有れば指定ポイントに行っておこう』
「ああ、助かる」

そうして、京谷さんは通信を切った。

「よし、じゃあバリアジャケットに変えて出撃するぞ」

「了解!!」

「アルル!」「レイジングハート!」「フィオネ!」

「はいっ!」「Yes, My master」「おっけー!!」

京谷さんと俺、なのはの呼び掛けに応じてフィオネらが応える。そして体は光に包まれ制服がバリアジャケットに変貌していく。

俺のバリアジャケットは黒が基調で、制服を黒くしたような感じにも見える。そして、腰には二本の刀が添えられ白のマントが左腕に巻かれている。

京谷さんの俺と似ているが、こちらは黒コートである。

「ふええ・・・二人ともかっこいいね・・・」

なのはが驚いたような顔で、こちらを見ながら言った。確かに俺と京谷さんが並べば天使と悪魔に例えられることもしばしばである。

「まあ俺はかっこいいからな」

「自分で言うか、京谷さん・・・」

京谷さんは分かっているという振る舞いをするのがしばしばある。まあ言動に行動がついていくのだから俺は文句言わないけれど。今思えば同じ年なんだよなあ・・・。

「どっした、一騎」

「いえ、なんでもないですよ」
「そうか、んじゃ行くか」

そう言つて俺達は再びブリッジに向かう。俺と京谷さんがならんで歩いている姿は輝かしく映つたのだから、すれ違う人ほぼ全員が敬礼で迎えてくれた。京谷さんは管理局では異常なまでの魔力と多彩な戦術に敬意を表して、”神帝”と謳われている。ちなみに俺は武器である二本の龍の名前がついた刀から”双龍”と呼ばれているらしい。

「人気者だね、二人とも」

なのはは笑顔で俺と京谷さんに話しかける。

「まあ・・・なあ・・・」

「人気者は困るぜ」

あはは、京谷くん自分で言つたら意味ないよ？」

「たまにはいいじゃないか、なあ？」

「いやいや、俺に振られても困るから」

「一騎は澄ましてやがるな。草食か、んん？」

あ、ちよつと暴走してやがるな。

そんなこんなで、談笑しつつブリッジに着いた。それから例の視界暗転による転送で第47世界ガイアの管理局基地”ユーノラス”についた。俺達が基地の広場に降り立つと、二人の士官が出迎えてくれた。

「お疲れさまです。本局管理補佐官、ニーチエ・ゲインズです」

「アルニカ・フォレスト通信士です！お茶の用意してますから、休

憩室にどうぞ」

「構わないよ、アルニカ。俺達がこんなことでへばると思うか？」

「ま、まあそうなんだけど・・・」

アルニカは困ったような顔で答える。それを不思議に思ったか京谷さんが口を挟む。

「知り合いか？」

「ああ、初めての単独で助けた子だよ」

アルニカは俺が初めて単独で担当した任務の際に助けた子である。震災の処理だったのだが、彼女は身寄りがなかったために俺は管理局で勤めることを勧めた。まあアルニカ自身に適正があったのもあるがな。

「お、じゃあなかなかイイ感じな・・・」

「んなわけあるか」

「・・・」

「ほらあ、一騎くんが否定するからアルニカちゃん沈んでるよ？」

なぜ沈むし。

「ここか？」

「はい、対象は北西の雪が多い大陸の南に渦潮に囲まれた島があるのですが、そこに局員が調査に行っていた折りに発見したそうです」

会議室のモニターにガイアの地図を投影しながら、俺達は例の敵の居場所を聞いていた。

「渦潮に囲まれた島かあ．．．不思議な場所だね」

「まあ渦潮に捕まったら大概は壊れるしな」

「つーことは、水の敵が出てきそうだな．．．」

「そうなりますね。ここは不思議に包まれた世界ですから。まだ分からないことはたくさんありますよ」

そう言つて、ニーチェは剣をひとつ取り出す。

「つてこれは？」

「この世界のエクスカリバーです」

「これがか!？」

「京谷くんのエクスカリバーとは違った形だね？」

「そりゃ、世界毎に同じ名前のはある。違う世界では同じ姿形したやつが俺達とは違う生活を送っているのだから。ちなみにこの世界には”真のエクスカリバー”があつたら、古代遺産の」

「はい、ですがどこにあるかは未だにさっぱりですね．．．つて話が逸れます」

「それがうちのクオリティだ。とりあえず向かえばいいのか？」

「はい、お願いします」

というわけで、早々と準備した俺たちはその場所に向かつて通常飛行で向かつていた。

『皆さんの速度なら10分で着きますね。後は定時連絡と帰還時のコールがあればこちらからは特に指示はしません。氷上空佐の指揮にお任せします』

「了解だ」

アルニカからの通信で任務確認をする。通信が途絶えた後最初に口

を開いたのは紫苑さんだった。

「そう言えば、今日で京谷が隊長になって三ヶ月じゃの。指揮には慣れたかの？」

「んー．．．ぼちぼちだな。それにうちの連中は優秀だから簡単な指示で思った以上の事をやってくれる」

「そうじゃの。シオンやアリスに掛ければ分隊指揮はお手のものじやろうから」

「ついでに言えば私と京谷くんが会ってもうすぐ4年なんだよね。

一騎くんとは2年かな？」

「そうだな．．．案外早いもんだ。皆階級が上がればもっと忙しくなるんだろうな」

「だな。俺は16になりや提督試験の権利得られるし、紫苑はもうすぐ一佐の試験がある」

「みんな目標あるもんねえ．．．」

なのはは遠い目を向けながら呟く。なのははまだ中学生だからそこまでのだろつが、ガチガチの局員な俺は十分に忙しい。そのうちなのはらがそうした時間を送り出すようになるのは嬉しいのやら悲しいのやら。

ちなみに俺がフェイト・はやてと面識がなかったのは二人とも俺とは別方面な仕事だからである。なのはからは会ってみるかと何度も言われたがまったく時間調整が出来なかった。しばらくすると、前方に渦巻き島が見えてきた。

「あ、あれじゃない？」

「．．．なんかいる？」

俺のマントにくるまっていたアルルが呟く。目を凝らしてみると、飛竜っぽいのが何匹もいた。そのうちの二匹がこちらに気づいたら

しく、こちらに向かってきている。

「確実に敵意を剥いておるの」

「だな。戦闘開始するぞ．．．一騎と紫苑は遊撃！！なのはは後方支援だ！！」

「了解じゃ！！京谷は指揮を！！」

「分かった！！」

そしてそれぞれ散開する。俺は一旦上空に上がった後、アルルと意思疎通を完了させた。

「いくぞ」

「ユニゾン・イン！！」

アルルが俺と同調し、ユニゾンインを完成させる。この間俺の髪の色が薄くなり、瞳の色も薄くなる。

そして銀竜の射程圏に入ったらしく、銀竜はブレスを吐いてくる。

それにいち早く反応した紫苑さんは、オリジナルのバリア系防御魔法”チェーンウォール”で防いだ。それに呼応して、なのはがデイベインバスターを撃ち込み、撃墜する。

俺はというと、銀竜の一匹が殺られたのを見た仲間が怒ってこちらに来たのを迎撃するために突撃していた。

『中継です！銀竜には特殊防御を備えているのを確認しました。気をつけて！！』

と言う声と俺の”ドラゴンスレイヴ”の攻撃が重なった。光牙は銀竜に向かって一直線に向かう。が、銀竜に張られたバリアに入った瞬間、攻撃が屈折した。

「!?!」

「攻撃が．．．曲がった?」

『(ジャマーフィールドに近い反応を検知しました)』

「む．．．様子見てワンシヨット」

『(ストライクチェーン)』

紫苑さんが攻撃を仕掛ける。魔力で形成した鎖が銀竜にまとわりつくが、腐りはねじ曲がりやがて砕けた。

「京谷、分かるかの?」

「ありゃあ、ディストーションフィールドだな。射撃はまず届かねえ」

「なるほどね。じゃあ、京谷くんも前線に出ようか」

「ああ」

そう言つて京谷さんはゲイボルクを呼び出す。それに呼応するよう
に、俺達は近接攻撃のスタンバイに入った。

「ACSDライバー、起動」

「ストックブレイク、スタンバイ」

「スネイクエッジ、スタンバイ」

刹那、全員が目標に向かって突進した。俺は固まっている箇所に、
三人は一体ずつに。

ゼロ距離において、ディストーションフィールドが通用するはずが
ない。なのはのエクセリオンバスター、俺のストックブレイク、紫
苑さんのスネイクエッジ、京谷さんの竜剣でまとめて葬った。

「すごいね．．．みんな。一瞬で全滅なんて」

「なんだかねだでなのはも落としているじゃないか」

「だけど、一騎くんや紫苑さんは複数倒したし・・・」

なのははそう言って俯く。俺のストックブレイクは範囲攻撃で、攻撃対象と半径数メートル内にいる同じ攻撃対象の敵に物理攻撃ダメージを与えることが出来る優れものの技だ。言うなれば雑魚殲滅用の技である。紫苑さんのスネイクエッジも似たようなものである。京谷さんがちよつと不機嫌なのは撃墜数で負けたからだろうな。そこに再び通信が入る。

『聞こえつか京谷』

「その声、カルトか？」

『ああ、任務中に例のやつとおぼしき奴が攻撃してきた』

「なんだと!？」

『まあ一捻りにしてやったが・・・これ、簡単に終わるようなもんじゃねえぞ』

命と同じ槍使い、”ロンギヌス”を駆る空戦S+の荒くれ者カルト・ヴェステンバーグさんはそう呟いた。

そう・・・俺達はこれから先に起こる事の重大さに、まだ気づかなかった。

R e w r i t e 2 : 同窓会任務に・・・なったらいいよな。(前書き)

命「投稿早いね!？」

作者「まあ・・・ねえ。とりあえず第二話」

R e w r i t e 2 : 同窓会任務に・・・なったらいいよな。

- v i e u c u l t -

「ちっ・・・派手にやってくれてるな」

俺は前方に広がる廃墟を見て嘆息した。ここはガイアで”霧の大陸”と呼ばれる大陸の南ゲートつつう空の関所にいた。

リンドブルム側に俺達やいるんだが、ゲートが盛大に破壊されていやがる。ここにいた連中はあらかじめ避難していたのがせめてもの救いか。

「・・・酷いですね」

隣にいたスノウ・ルウベル力が呟く。こいつは日本刀を駆るS+のベルカ式の魔術師だ・・・ってなんで俺が説明せにやなんのだ。

「まったくだね・・・。けどいない分、目撃情報がないのよね」

はあ、とセレナ・チェリカールはため息をつく。まあこいつはミッドだ、うん。俺と同じ槍を使う。

「話を総合すると、飛空艇を通すためにゲートを開けた瞬間謎の攻撃があつて・・・それでなんかでかい爆発があつたってこつたな、ガキンチヨ」

『は、はあ・・・そんな感じですよ。なんか怖いですが・・・(ボソッ』

「う、おおい!!怖いつてなんだゴルア!?!」

『ひ、ひいい!!』

「カルト、新人泣かしはだめですよ」

「これだから若い子がついてこないんだよ」
「やかましあ!!!」

スノウとセレナに宥められたので仕方なく退いてやった。

- v i e u k a z u k i -
「ん・・・これは？」

通信が終わった直後、俺はひらひらと舞う羽根を見つける。それを
手にとると非常に艶やかな触り心地がした。

「ん、どうしたの・・・ってこれは？」

「どれどれ・・・む、これは銀竜の羽根じゃの。普段は倒せば砕け
て消滅するのじゃが、残るのは稀でな。ぬしは幸運だの」

「そうなんですか？」

「うむ、まあなにかに使えるかもしれんから大事にとっておくとよ
かるっ」

紫苑さんにそう言われたので、俺は懐に銀竜の羽根を仕舞った。

「うし、じゃあ帰るか」

京谷さんの一言で、俺達は帰還体勢に入る。その帰り道、なのはは
京谷さんに質問した。

「ねえ京谷くん、ディストーションフィールドについて詳しく教え
てくれないかな？」

「ディストーションフィールドか？それはフィールド防御のひとつ

でな、周囲に鏡みたいなのを展開して攻撃の屈折を行うんだ」

「魔力による攻撃も光が含まれておるから曲がってしまっくんじゃな」
「そうだ。威力が高いものはある程度は押し込めるが、かなり弱められるし敵の魔力が高いと大したダメージにならない。そこが怖いところだわな」

「でも至近距離ならあまり曲がった感じはしなかったんだけど．．．」

「まあな。ディストーションフィールドは周囲に展開、さらに表面しか効力がないから範囲の中では効果がない。だから、ゼロ距離の攻撃にはめっっぽう弱いんだ」

「なるほど．．．」

なのはは関心深そうに頷いた。そこに俺は紫苑さんに話を振ってみる。

「まあ射撃型には辛いもんがありますよね、紫苑さん」

「そうじゃの。特になのはやはやてみたいながチガチの砲撃型には天敵に近いじゃろ」

「そうですね．．．」

「ま、いい機会だから対策練ったらいいじゃろ」

「はいっ」

そんなこんなで時間が過ぎていった。

- v i e u c u l t -

「そういえばカルト、一緒に任務は久しぶりですね？」

「ああ、そうだな。この三人は久しぶりか」

突然のスノウの言葉にそういえば、という風に俺は頷いた。

「ま、隊長が気を使って二人きりになるように調整してるしね」
「・・・後で小突いとくか」

要らん気を回すやつにお仕置きすることを誓いながら、あたりをまた見回す。南ゲートが大破している以外は、緑が広がるよい所だと俺は思う。どうやら、南ゲート平原に美味しい湧き水があるらしいから、帰りに飲むのもいいだろうな。そんなことを考えながら横を見ると、セレナが考え事をしていた。

「どうした、セレナ」

「ふえ！？あ、いや・・・」

突然声を掛けられて、素っ頓狂な声をあげるセレナ。

「それより・・・良いとこだね」

「ああ・・・」

俺が思っていたことなので、おとなしく頷いとく。

「せっかいですから、少し歩いて回りますか？」

と、スノウ。

「うし、じゃあ下に降りるぞ」

「了解っ」

そう言って、俺達は飛行魔法を使って、平原の南ゲートに降り立つ

た。

「へえ．．．緑が凄いな」

「気持ち良い場所ですね」

二者二様の感想を耳にしながら、俺は湧水の方を見た。すると、なぜかポットとコーヒーセットが置き去りとなっていた。

「ってなんでこんなもんが落ちてんだよ」

「どつたのー」

俺の突っ込みにもセレナが反応する。そして俺の背中からひょっこり顔を出して問題のブツを見て、

「ってなんでこんなもんが落ちてんのさ」

同じ突っ込みを入れた。ちょっと面白くなった俺はスノウを手招きして呼ぶ。

「どうしました、カルト？」

スノウが来たので俺は一步引いてスノウにコーヒーセットが見えるようにした。スノウはそれを見て、

「たかがこんな．．．。．．。ってなんでこのようなものが落ちているのでしょうか」

スノウの優しさに全俺が泣いてしまった。

まあそんな事を言っているとしてもしょうがないので、二人を適当に休ませつつ俺はコーヒーを淹れていた。銘柄はモツカ。俺は甘ったるくて嫌いだ、二人が美味しそうに飲んでいるのを見て満更でもないなと思った。

「カルトは飲まないんですか？」

淹れるだけ淹れて飲んでいない俺を見てスノウが心配そうに話しかけてくる。

「甘えのが嫌いなだけだ」

「まあモ力だしね。カルト的にはキリマンのーが良かったんでしょ」
「まあな」

まあせつかくなので一口啜る。確かに甘ったるいが、使った水が良いいいか何故か美味かった。いい水がいいコーヒー作るって本当なんだな。そんな矢先に基地から通信が入った。

「ああ!？」

『中継基地です。南ゲート前の平原にエネミーの反応があります。気を付けてください』

「カルト、あれ」

通信が入ってすぐに、セレナが敵の存在に気づいた。

「能力は」

『わかりません、アンノウンです』

「そうか、まあアンノウンなのはいつもの事か。中継基地、カルト・ヴェステンバーグ、スノウ・ルウベルカ、セレナ・チェリカールで迎撃する。．．．出んぞ」

「わかった」

「わかりました」

二人にそれを伝えて、飛翔する。指定の座標軸に來ると芋虫っぽいやつが俺たちがいた場所に群れてきているのが見てとれた。

「うわなにアレキモツ!!」

「．．．なにか吐き気がしますね」

「全くだな」

つい正直な感想を言っちゃまった。まあいい。

「燃やし尽くしてやるぜ．．．ッ!!」

俺は炎を纏わせたロングノスを抜いた。

I v i e u k a z u k i i

「カルトラがアンノウンと接触したみたいだな」

「ええ!??」

京谷さんが口にした言葉になのはが驚愕の声をあげる。

「ふむ．．．しかしそれでもすごい勢いでぶっ倒しておるの」

紫苑さんが言ったとおり、カルトさん達は激しく暴れまわり、敵を打ち倒していた。だけど不安なことはある。

「後処理どうするんだ・・・」
「・・・それは気にしない約束じゃ」

ガイアの生態系の維持に一抹の不安を覚えながら、ユーノラス基地に帰還した。

- view kurono -

どうやら無事に任務に当たっているようだ。優秀な人間が事に当たると非常に助かるな。

だが、これで余計に事が分からなくなる。それは何故か。

「行動が予測出来なさすぎる・・・」
「そうだね・・・」

僕のばやきにフェイトが同意する。執務官の職に就いてるだけあって、そのへんはよく分かるらしい。

「作戦指揮官の辛いところだね」

フェイトが同情の言葉を上げる。指揮官はあらゆる方面から物事を見なければならぬ。それに対応できる部隊がいるのか、どれくらいで手配できるか、など事務処理がいつも付きまとう。特に、各部隊には保持制限があるからおいそれと出撃手配ができないのも歯痒い。まあ・・・ナイツオブラウنزは局長特轄だから例外で破格の

戦闘能力を持ったやつが集まっているが。

「とにかく、手当たり次第に探すしかないのが現状だな」

「そうだね……。そろそろみんなが帰ってくる頃じゃないかな」

「ん、そうだな。全員基地に着いて転送処理に入ったところか」

僕はモニターを見て呟く。どうやら遭遇した敵と派手にドンパチやっていたらしくカルトは不満そうに、一騎はやれやれといった感じな顔を浮かべていた。すると、無限書庫から通信が入った。ユーノか。僕は直ぐ様繋ぐ。

「ユーノか」

『うん。検索した結果、”みおん”に該当するデータは30件ほど』

「内容は」

『内容ねえ……。全然大したことないよ。なんせ40年も前に管理局に居た魔導師、しもさかみおん下坂魅音って人の一部戦闘ビデオと彼女の書見と
か程度』

「下坂魅音……?」

僕はその言葉に覚えはなかった。40年前となれば”三提督”より前の時代だ、俺の知り合いでは誰一人知らないかもしれない。

『まあ誰も知らないよねえ、知ってるならあの人と同じ時代の人くらいだと思うよ』

「どういう意味だ」

『今の管理局の人間のほとんどの人間は知る由がない。要するに……彼女の事はタブーでもあるんだ』

「はあ?」

『何故かと言うと……。書見で見たんだけど、下坂魅音が管理局に居た期間はたったの二年弱。居なくなつたのは、新暦0029年の

12/4になつてる』

「それは、”エクスワールド事件”じゃないか？」

『そうだね。それを境に彼女のデータはまったくないよ』

ユーノがそう言つて、僕は考え込んだ。余計に接点がつかなくなつてきた。みおん。下坂魅音としても、今回の事件に何ら結び付きがない。やはりボツなのか？

僕は頭をフル回転させようとしたところでそれは霧散した。みんなが帰ってきたからだ。

- view kazuki -

「「「ただいま戻りました」」」

全員が声を揃えて、帰還を伝える。そこにはクロノさんとフェイト、そしてモニターにはユーノがいた。

『あ、なのはお疲れさま』

「ユーノくんもお疲れさま」

なのははマイペースにユーノと会話する。クロノさんがバツを悪そうにしている辺り、なにか取り込み中だったのかもしれない。

『それじゃあ引き続き検索や情報収集に専念するよ』

「わかった、任せたぞ」

ユ一ノが通信を切る。そして振り向いたクロノさんは労いの言葉をかけた。

「お疲れさま、みんな」

「ああ、ただいま」

「うーっす」

「クロノ提督もお疲れさま」

など、各々が返事を返す。そのまま京谷さんは続けた。

「そっちはどうだ」

「それはこれから話す。だから紫苑も残っていてくれ。他のみんなは母さんらが会食の準備をしているからそっちに向かっているから」

「やたあー!!」

「ご飯ーっ」

飯と聞いて、セレナと残っていた優希が喜色の声をあげる。同じく残っていたはやてはふむと考え込む仕草をする。

「せやから、シグナムらが今朝から居らへんかったんやなあ・・・」

「あー・・・じゃあうちの連中もか」

「京谷くんとこも？」

「なにせよこの人数だしな・・・人手が要るんだろっな」

「せやなあ・・・うちらが見てるメンバー殆ど大飯食らいやから・・・」

「」

二人してふう、とため息をついていた。なんなんだ？

「まあいい・・・。みんな一騎と行ってこい」

「はぁーい」

「って待てや」

「なんだよ一騎」

「なんで俺がお守りなんだ、カルトが居るだろ」

「俺アガキのお守りなんざ出来ないんでな」

「．．．だよ」

出来ないじゃなくて、ただダルいだけなんじゃないだろうか。

「そんなこと言ったらスノウとの子供が出来たらどうするのよ」

「う、おおいテメエ喧嘩売ってんのかゴルァ!？」

セレナが止めを刺した。スノウはと言うと。

「わ．．．私がカルトの．．．／／／」

乙女モードが発動していた。なのらはあはは、と愛想笑いを浮かべるだけだ。

まあ、こういうのは取り分けラウンズ内では日常だったりする。俺としては迷惑省みないのだが、今では満更でもない。そうこうしているうちに終息したので、食堂に向かった。

- view kyoya -

やれやれ、ようやくみんな行きやがったか。しかし、あのカルトを宥めるとは優希も凄いな。

「．．．で、どうして俺と紫苑を残したんだ？」

「それは二人が一番冷静な判断が出来ると思ってたからな」

「儂はともかく、京谷がそんな器の広い男には見えぬのじゃが．．．」

「じゃあ二代目隊長にするなよ。」

「まあそうなんだが．．．」

「そこで認めるな、悲しくなる。」

「別に一騎も残してもよかつたんだが．．．実践経験、まだあいつは一年とないだろ」

「そうじゃな．．．まだ短期カリキュラムを終えて一年とおらんから、いくら落ち着いた童（わらし：子供の意）でもさすがに不安じやろつて」

紫苑はふむ、と首肯した。そう．．．まだ一騎は実践経験が拙い。というか、あいつが魔法に触れてまだ2年しかないのだ。俺が一騎と出会ったのは、なのはと保護任務をしていたときだ。たしか、魔物に囲まれていたのを助けたのが最初だったな。その直後、不意を取られたのをあいつが俺が出していた『エクスカリバー約束された勝利の剣』を奪って防いだ。

あれは嫉妬したな、その後その敵を一撃で潰したんだしな。それから一騎は唯一の肉親である妹を連れて管理局入りを決めたのだ。そして卒業後の進路にナイトオブブラウズを選び、今に至る．．．と。

「おい京谷、なにを呆けておる。行くぞ」

「ああ．．．すまない」

紫苑に呼ばれ、俺は二人に付いていった。

そして向かったのは何やら薄暗い記録室。

「ここは？」

「見ての通り、記録室だ。これを見てくれ」

そう言つて、クロノはパネルを操作してひとつの映像を投影した。そこには、フェイトに似たバリアジャケットを着たなのは似の少女が、恐ろしい反応速度で演習用CPUを叩き潰している映像が写し出された。

「・・・京谷が女だったらこういつ感じだったのじゃろつな」

紫苑がポツリと呟く。

「彼女は、下坂魅音。管理局で二年間働いていた空戦EXの魔導師だ」

「EX？」

「てつきり俺だけだと思つていたけどな。だけどリンディさんだけは俺の魔力量見てそこまで驚いてなかったしいてもおかしくないなとは思つていた。」

「ああ、当時の管理局の魔力ランクじゃ彼女の魔力量を定義できなかったんだ。それくらい、異常な量の魔力を持っていたらしい」

「まさに京谷じゃな」

「だけど、そんなくらいすごいやつならもつと資料残つていてもいい

んじゃないか？」

俺は核心を突いた質問をする。しかしクロノは横に首を振った。

「残念だが、欠片も残っていない。よくよく調べたらこの資料も近いうちに廃棄指定になっていたしな」

「それはよく意味が分かるんの。それほど魔導師なら、後世に末長く名を残すべきじゃろ」

「それはそうなんだが・・・どんなデータベース探しても、ほとんど残っていないんだ。理由がわかれば苦労しないな」

クロノは嘆息するように言った。俺もしばらく考え込む。なぜ、そのような魔導師がいて、ここまで記録が少ないのか。あたかも彼女がいたことを隠そうとしているようにしか見えない。

「まあ・・・現状では判断材料に乏しすぎるじゃろ。今はこの件は保留じゃな」

「ああ・・・では、二人も食堂へ向かってくれ」

「ああ、クロノは」

「僕はもう少し書見していくよ」

「りょーかい」

そして、俺と紫苑は食堂へ向かった。

ところ変わって食堂。俺達が食堂に着くと、そこではシャーリーさんやリンディさんに加え、アリスやシオン、フィオネらもいた。

「おかえりー」

「お疲れさま」

「あれ、京谷は？」

「まだ記録室じゃないかな」

「そっか・・・」

「ってなんやねんこの料理の多さ」

はやてが料理の多さに突っ込みをいれる。それにシオンと星川姉妹がフオローを入れた。

「私たちが買い出しに行っていたのですよ」

「だよー」

「ですよ」

あー、だから用事が・・・とか言っていたのか。多分きららとさららもシオンの手伝いで来たのだろうな。

「あ、この辺は京谷くんが」

「京谷さんも？」

「せっかくみんな集まるなら、って急遽手配したみたいよ」

妙なところで気が回るやつだな、とか思いながら食卓を見回す。本当に彩りみどりで美味しそうだ。

「さ、みんな。たと召し上がれ」

「「「「「「「「「「「「「「「」

リンディさんの声で、それぞれが食べたいものところに行き、皿に取って食べる。俺は無邪気組のみんなの動向を見ながら一息ついた。そこになのはらエース三人娘が近寄ってくる。

「はい、一騎くん」

「ああ、ありがとう」

なのはから、ジュースが入ったグラスを受け取り4人で乾杯。ちよつとだけ嬉しかった。

「なに食べよつか、リイン？」

「私はあれがいいですー」

「いきなり七面鳥!？」

「はやく食べないとアルフに食べられるです．．．」

「あはは．．．」

「一騎くんはなに食べんねや? ついでくるで?」

「ん、そうだな．．．」

せつかくなので、立ったままでも食べられるものをお願いしたら、さすが関西娘。焼き鳥と串カツオンリーだった。

「主はやて、こちらでしたか」

「あ、シグナム。それに他のみんなも」

「ん、新入りか? はやて」

「あ、こっちのイケメン「イケメン言うな」は一騎くんや」

スルーしやがった．．．!

「ふむ、ではあちらの子供たちは?」

「あっちのちっこいのがきららとさくら。赤い髪止めのがきららな。」

で、その後ろにいるのが俺の妹で優希。そいでカルトさんらというのが希来」

「ほう．．．ラウンズもいつの間にか若年戦力を入れていたのか。しかし、京谷もだがこの年齢で特務隊とは恐ろしい子供だな？」

「．．．まあ」

シグナムのペースに簡単に吞まれそうになる俺。さすが、管理局の姉御と呼ばれることはある。

「して．．．剣が得物か」

「あ、はい」

「よし、後で模擬戦だ」

「またシグナムやってらあ」

「む、なんだヴィータ。別に構わんだろう、猛者と戦いたいと思うのは戦士としての本能だぞ？」

「あはは．．．シグナムは戦うの好きだしね」

フェイトはシグナムの強引ぶりにあははと笑う。人の事言えないだろ、とヴィータが視線を送っていた。それに気づいたフェイトは反論する。

「な、なによヴィータ、その”お前も人のこと言えないだろこのバトルマニアが”みたいな視線は」

「当たり前だろ、いつもうちのシグナムと模擬戦してるくせに」

「あう．．．」

「あはは、フェイトちゃんも好きだもんね」

「なのはまで〜．．．」

フェイトはしゅん、と頂垂れる。俺はその様子を微笑ましく眺めていると、制服の袖を引っ張る者がいた。優希である。

「お兄ちゃん」

「ん、どうした」

「せっかくだし、アレ見せない？」

「ああ．．．アレか」

そうやって、俺は情報端末を操作する。

すると、俺の情報端末に3人の少女が写し出される。

「あれ、この子らは」

「『アーク、エリカ、ステラ13歳誕生日』祝い」

「ああ、マテリアル三人娘だよ」

「たしか京谷らが保護したんだっけ」

そう．．．彼女らはなのはらが9歳の時に対峙した闇統べる王、星光の殲滅者、雷刃の襲撃者だ。二年前たまたま鉢合わせになったところを俺達が保護し、現在に至る。

「まあ闇の書プログラムゆつても、素性は女の子やしな。しかしうちらによつ似とるなあ」

はやてはまじまじと、三人の写真を見比べる。シグナムはふう、と息を吐いて

「まあみんな正反対だがな、特にテストロッサ」

「ええ．．．っ！」

「あー．．．それは分かるかも」

「なのはも!？」

「アホの子だもんね．．．」

「あはは．．．」

「あれ、一騎引つ張りだこだねこれ」

そう言つて、優希は俺の端末を操作して俺がエリカらという写真を表示した。

「まっただくだな・・・この色男め」

「ちげえよっ／＼」

「あはは、一騎くん顔赤いねんで？」

「くう・・・ってフェイトはなんで難しそうな顔してるんだ？」

「ふえ！？な、なんでもないよっ／＼／＼」

首をブンブン振つて否定するフェイト。なんなんだ？

「フェイトちゃん照れちゃって可愛い」

「違いますよシャマルっ／＼／＼」

とまあフェイトが弄られてる間に、俺は串カツと焼き鳥を平らげたので、おかわりをしに食台に向かう。おかわりを適当に注いでいると、隣にはシオンさんがいた。

「どうしたんですか、シオンさん？」

「いえ・・・」

シオンさんはふるふると首を振つた。それに併せて、黒リボンで縛つた長い尾の髪が揺れる。

シオンさんとは年が五つも違つたためか、お姉さんのような風がある。もちろんシグナムのような姉御気質ではなく、優しく物静かなタイプだ。昔から身寄りのなかつた俺としては、少し憧れでもある。

「皆さんとは割りと馴染めてますね」

「まあ、あれくらいいごいご来られる方が嬉しいしな」

「そうですか・・・」

そう言つて、わずかに微笑むシオンさん。いつ見ても落ち着く笑顔だな、と思う。

「あ、いただきますね？」

と言つて、シオンさんは俺の串カツを取つた。代わりに俺はシオンさんがついでいたおにぎりを貰つて食べた。

そんなこんなで時間が過ぎ、あらかた平らげたところではやてが再び声をかけてきた。

「せや、一騎君は三日後からの盆休みは暇してるん？」

「ん？ああ、暇だが」

「せやったら、うちらと旅行行かへん？」

「旅行？」

「せや、地球の日本、大分に旅行や」

なんでそこなんだよ。俺たちならミコノスでも十分行けるだろうに。

「誰が行くんのだ？」

「せやな、今のところはセレナちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、命ちゃん、優希ちゃんやね」

「女の子ばつかじゃないか」

「せやから、一騎くんと希来くんに来てほしいなと」

「京谷さんやカルトさんでもいいだろ」

「カルトさんはなんか怖いし、京谷くんに相談したら」一騎連れて

いきなよ、いやむしろ命令で行かせる” ゆつて」

「前者は納得できるが後者はふざけんなカスがつて感じたな」

「う、おおおい、どういう意味じゃゴラァ!？」

「ひゃあ!？」

カルトさんの怒声に方をすくませ、背中に隠れるはやて。何故かは解らないが、恐怖対象のようだ。

「まあまあカルトさん」

「つててめえも納得してんじゃねえ!!」

「事実ですし・・・」

「認めんな!!」

「まあまあ、そのへんにしとけよカルト」

そこに京谷さんが割って入る。カルトはバツが悪そうに舌打ちをし、そこを離れる。

「で、誰がふざけんなカスがつて? (ニコツ)」

「お前以外に誰が居んねん、なにが悲しくて子供たちのお守りを」

「やらなかつたら管理局全体にお前のロリコン癖を流すからな」 分かった任せておけ」

うむ、天涯孤独より四日間みんなの面倒見る方が何倍も楽しだな。

いくら俺でも物事の善し悪しは分かるつもりだ。

「それにみんなの面倒見てる方が、お前は顔が活き活きしてるしな」

「そうかあ？」

京谷さんの言葉に俺は面を食らったような返事をした。まあ、自分が知らない部分を人が知っている時もあるが。

「そうですね。一騎は面倒見がよいですから適任かと」

「そうじゃの。京谷でも構わんじやろうが行動の自由という点では一騎に軍配があるじやろうて」

紫苑さんとスノウも京谷さんの決定に同意する。それを聞いて、京谷さんは俺の方に手を置き、満面の笑顔で

「ま、ハーレムを楽しんでこいや（ニコッ）」

カルトさんがたまに京谷殺すとかほざく理由が何となくわかる気がした。俺は頭を掻きながら了承し、シグナムに目配せする。それを感じ取ったシグナムはうむ、と頷いて近づいてくる。

「では京谷、一騎と模擬戦するから借りていくぞ」

「ああ、ボッコボコにしてやってくれ」

「ふむ、やれたら尽力しよう」

「あ、優希ちゃん私とやるんだよね!？」

「ふえ!？」

「任務前に言ってたでしょ?さ、行こ!」

「うえ、あ、ちょ、ふにゃああああ!？」

模擬戦の約束を思い出したなのは優希を引きずって、訓練室に向かった。

「じゃあ、行きますか」

「うむ」

そうして、なのはvs優希、シグナムvs俺の模擬戦が行われることとなった。

R e w r i t e s : 魔王VS妹 俺VS烈火の騎士(前書き)

京谷「マジで閲覧とかあるのか？」

一騎「さあ？」

命「作者は趣味で書いてるしいいんじゃない？でもせっかくなら読んでほしいよね」

京谷「まあな」

一騎「では始まるぞ」

R e w r i t e 3 : 魔王VS妹 俺VS烈火の騎士

「じゃあルールを説明するね」

審判役としてついでにきたフィオネが今回の模擬戦のルールを説明する。今回は公式のダメージカウンターを携行しての模擬戦で武器は非殺傷設定、貫通その他付加効果は非発動、ダメージカウンターは3000で行われることとなった。

ダメージカウンターは受けた衝撃の程度で数値が減っていき、0になればブザーがなる優れものである。また、こちらの防御や切り払いも検知してダメージ調整が行われるので安心して受け止めることができる。

「じゃあ私と優希ちゃんからだね」

「うう．．．」

初めて対戦するタイプに楽しそうなのはに対し、いらんとばかりを食らって鬱気味の優希。テンションの差は歴然である。

「ずいぶんテンションが低いな、お前の妹は」

「なんか恐怖対象みたいだ」

なのはと優希の模擬戦が終わるまで、外で見守ることを決め込んだ俺とシグナムは二人してコーヒーを啜っていた。

「一騎があいつらならどう戦う？」

「え？」

「一騎が優希、なのはの立場に立って戦うならどんな対策を取るか、だ」

俺がなのはなら、優希をどう攻めるか。優希はデバイスこそ剣だが、どちらかといえば魔法でお膳立てして、斬りつけるタイプだ。ならば。

「そうだな、まずはフェイスのチャージタイムを取らせないようにする」

「フェイス？」

「優希のデバイス単体の攻撃力を強化する魔法でオリジナルなんだ。あれを使われたら、いくら魔法を防いでも間合いを詰められて、十八番の”フリンジングラッシュ”かまされて撃墜とされるな」

フリンジングラッシュは優希が現時点で使える最強の技だ。四撃一体で、右薙ぎ、左薙ぎまでは同じでそこからは自転して足撃ちや踏み込み撃ち等三撃目はバリエーションに富む。四撃目は上からの切り下ろしか回転して突撃、または2本の剣で振り抜く形となる。形はどうあれ、3と4の破壊力は本当に優希かというくらい凄い。試し撃ちの時受けたが、凶らずも吹っ飛ばされた記憶がある。

「ふむ、では彼女は数で攻めるタイプなのだな」

「ああ、しかもタチの悪いことにひとつふたつ潰しても、すぐに修整してくる。なのはが勝つにはいつ優希の計略に気づくか、だな」

「じゃあ優希の立場なら？」

「優希なら、でかいのを撃たせないことだな。なのははシューターがあるから、それをいかに掻い潜って間合いを詰めるか。そしてバスターとブレイカーを撃たせなければ敗けはないと思う」

「だが、曲がりなりにもなのはは戦技教導隊の人間だ。ただ対策を打つだけでは優希は勝てんだろうな」

「ああ、勝負の分かれ目はどちらの数撃ちが先に鈍くなるか、だな」

「お互い頭は良いから、単純な魔力比べには・・・お、始まるぞ」

シグナムがフィオネのゴーサインに気付き、俺は訓練場に目を向けた。

I v i e w n a n o h a i

うわあ、初めて対戦するタイプだからときどきだなあ。

優希ちゃんのデバイスはあの2本の剣みたい。だけど、私と同じミッドチルタ式なんだよね。ということは魔法は使えるけど、どちらかといえば詰めるタイプなんだね。

「じゃあ、いきますよ？スタンバイレディ・・・」

フィオネちゃんの掛け声を聞いて、私はレイジングハートを構える。

「ゴーツ！」

ゴーサインの刹那、優希ちゃんは直ぐに詠唱を始めた。私はアクセルシューターを展開して全弾叩き込む。だけど、さすが優希ちゃん。詠唱破棄して切り払った。

「やああああ！！！」

優希ちゃんはその反動を利用して斬りかかってくる。私はそれをレイジングハートで受けた。

ギインツ

そのまま、鏑迫り合いの状態に入る。力任せに押し合う時間が少し続く。

「ッ！！」

これまた同時に振り払い、距離を取る。そこから私はデイバインバスターの発射体勢に入った。見れば、優希ちゃんもなにか唱えている。

「デイバイン．．．バスター！！」

「クロス．．．スレイヴツ！！」

お互いの砲撃と斬撃は中間距離で交錯し相殺、大きな爆発が起こった。だけど、その上から大きく優希ちゃんが飛び上がった。

「ACSドライバー、ドライブ！！」

それを見た私は、私の近接攻撃モードであるACSドライバーを起動させて迎撃した。その直後、優希ちゃんの一刀と私のバスターがぶつかる。

「．．．ッ」

優希ちゃんは苦虫を潰したような顔をする。どうやら、これは完璧に不意を取ったと思ったみたい。だけど甘いね。

「私は．．．簡単には落ちないよ？」

私はつい、そう微笑みかけた。

I v i e w y u k i i

強い。

私が一番最初に思った感想。フィオネさんの始めの合図の瞬間に、あれだけの破壊力を持った攻撃を素早く撃ち込まれたときは瞬殺されるかと思ったくらいだ。それをなんとか切り払って防いだ後も、ほとんどの行動で私は遅れをとっていた。

そして今も、不意を取ったと思った一撃を難なく止められている。

「私は・・・簡単には落ちないよ？」

そう言われたとき、私は言うだけの力はあると思った。それに、ランクも年も上だしね。

「・・・でも、負けられない!!」

私は距離を大きく取る。そして私のサンライズとルナティックの柄を合わせ、キーワードを唱えた。

「クロスジャベリンモード、ドライブ!!」

クロスジャベリンモードは、私の2本一対であるこのデバイスを1

つにして扱いやすく、かつ攻撃力の増加を図るモードだ。さすがになのはさんもビックリしたんだろう、少し驚愕の表情を浮かべた。

やるなら、今だ。

それを悟った私は一気に間合いを詰め、ルナティック側で突きを繰り出す。それをなのはさんは紙一重でかわし、さらにそのままアクセルシューターを私目掛けて撃ってきた。さっきはかなりヤバかったけど、今は大丈夫。そのまま反転して、剣をバトンのように回して防いだ。

「!?!」

「まだまだあ!」

その隙を見逃さない。刹那にクロスジャベリンモードを解き、横薙ぎに一閃。切っ先なのはさんのバリアジャケットをわずかに裂いた。さらに、

「アクアジェット!!」

ルナティックを自分の足元に撃ちつけ、水撃を発生させた。しかも、これは私の技の中で一番弾速が速い技だ。

『ProtectionEX』

「っ!」

やっぱり簡単にはいかないか……。プロテクションEXで防がれてしまった。

「優希ちゃん……。凄いね。私、もっと全力で行けるよ……。!」

「・・・お好きに！」

と思った矢先、なのはさんのただならぬ魔力の上昇が始まる。そしてなのはさんが手を翳すと、アクセルシューターよりも威力の高そうな魔力弾が形成された。

(クラスター!!)

本能的に身の危険を感じた私は防御魔法”ウイングブレイカー”を展開し、空域を素早く離れた。数瞬遅れて、私が居た辺りで爆発が起こる。

(・・・防ぎきれないの!?)

なのはさんはさらにフライヤーフィンを全開にしたままアクセルシューターを撃ってくる。ここまでされると私は防ぎきれない。瞬間に蜂の巣にされ、私はバランスを崩した。だが、もっとえげつないことをしてくる。あるうことが、そのままダイバインバスターを向けてきた。

(嘘!?)

直ぐに体勢を建て直して、なのはさんにダイバインバスターを撃たせまいと迫る。

「ダイバイン・・・バスター!!」

遅かった。射線軸にいた訳じゃないが空戦Sの砲撃だ、かすっただけでも私は大きなダメージを受けた。カウンターを確認すると、既に500になっている。どうやら次の攻撃で雌雄を決しそうだ。

「最後は、お互いの全力全開で決めましょ」

なのはさんは、そう私に言ってきた。．．．挑むところよ、こちらも自身の必殺技を繰り出そう。私は剣を構え直した。

- view nanoha -

うん、反応速度もなかなかだし私の攻撃も読めてる。けど体が頭についていてない感じ．．．かな。時々反応が鈍い。そしてさっきの攻撃でカウンターも大分減っただろうと思う。お互いの全力全開で決めましょって言ったけど、ぶっちゃけあの子の最高の攻撃が見ただけなんだけどね。

『starlight breaker』

そして全力全開の必殺砲撃、スターライトブレイカーのスタンバイに入る。念のために発射直前に効果が切れるようにプロテクションを張っておいた。

『10．．．9．．．8．．．』

カウントダウンに入る。しかし、優希ちゃんは動く気配がない。何か策があるのかな。

『7．．．6．．．5．．．』

が、まだ動かない。

『4...3...』

その時だ。突然、優希ちゃんの姿形がぶれる。そして、気づけば目の前に迫っていた。

(チャージ!!)

優希ちゃんの右薙ぎの一撃が真つ正面からぶつかると。もちろん、プロテクションを張っているため届くことはない。が、優希ちゃんは構わず左薙ぎの一撃を叩き込んできた。

(さらに連撃...!)

じゃああれはチャージタイムだったのか! やられた...! だけど... やらせない!!

- view yuki -

(防がれた!? だけどもめげるもんか!!)

私は構わず三撃目に入った。私の攻撃力が極端に大きくなるその一瞬は、なのはさんのバリアを完全に打ち砕いた。

「な．．．!!」

なのはさんが驚愕の表情を浮かべる。しかしそれも一瞬だった。目の端でそれを捉えたとき、ブレイカーの発射を予感させた。

「スターライトオ．．．ブレイカーッ!!!」

「ぶっ．．．とべえッ!!!」

私のフィニッシュとブレイカーが真っ正面からぶつかった。暫しの均衡状態が続く。しかし、それも程なく終わった。私の攻撃の効力がなくなったのだ。スターライトブレイカーをモロに受けた私に為す術はなく、結局試合なのはさんの圧勝で幕を閉じた。

- v i e w k a z u k i -

「あー．．．お兄ちゃん負けたあ．．．」

「あはは．．．よしよし」

いくら実力が掛け離れていても悔しかったのだろう、シュンとなった優希の頭を俺は撫でる。

「で．．．どうだ？うちの妹は」

「うん、初めて戦うタイプだったとは言え攻撃やトラップ、誘導が素直だから看破しやすかった。けど、AAランクらしかぬ突破力と瞬発力は光るものがあるね。私なら．．．そうだなあ、もう少し射

撃能力とスタミナ、そいで瞬発力のさらなる強化に重点置いて．．．
それに加えて最後の技に近く、かつ使い勝手がいい技の会得を目指
させるかな」

さすが戦技教導官。分析や傾向だけでなく、これからの成長指針ま
で打ち出した。ふむ、じゃあ優希の指導をなのはにさせてみようか
な。優希はあまり人と仲良くしようとしないうつだからいい機会だ。

「なあ、優希の指導を任せていいか？」

「優希ちゃんのこと？」

「ああ、優希は今でこそアレだがあまり人と仲良くしようとしな
やつだから．．．教導もかねて仲良くしてほしくてな」

「．．．なあに言ってるのよ一騎くん？私は元よりそのつもりなん
だからね」

「そっか．．．じゃあよろしくな」

「うん よろしくね、優希ちゃん」

「．．．はいっ」

良かった、なんとか打ち解けられそうだ。そう思っていたときに、
肩に手を置くものがいた。シグナムである。

「では、殺し合い（試合）を始めようか」

「ああ、なんか当て字が違う気がしたが突っ込まないでござい」

「が、頑張つてねっ（ガクガクブルブル）」

いやいや、なんで微妙に震えてるんですか。まあこの直後、俺はそ
の当て字があながち間違いないことを身を持って知ることになった。

「どっしたんだ、はやて。そんなご機嫌に鼻唄唄って」

俺達はあの後食事の跡形付けがてら、アースラの食堂でのんびりしていた。

俺はというと、はやて、アリスと食器洗いをしている。なにが悲しくて男が食器洗いなんだか。紫苑曰く”意外性を突いた起用”らしい。

「そりゃあみんな旅行は楽しいやんか？」

いや絶対嘘だ。一騎と話すのを心待ちにした目だ。思えば興味を引いたものにはとことん詰め寄るからなあ、こいつは。でなきゃあの日に俺に興味を抱くことはなかっただろうし、ある意味こいつが興味を持ったから今の俺がいる。だから一番感謝しなきゃならないのはこいつかも知れない。

「楽しそうだね、はやて」

「せや まあ同年代のみんなで行ければ一番ええんやろうけど、こればっかりはなあ・・・」

「大丈夫だよ、はやて。はやてが帰ってきたら今度は残ったメンバーが休みだからその時は盛大に自慢しながら行ってくて」

「なんや今日は意地悪やな？」

それはお前が一騎にホの字な感じに見えるからだろ。アリスはツンデレでヤキモチ焼きだからな。

「．．．なんか失礼なこと考えた？京谷」
「気のせいだろ」

「ってなんでこうも勘がいいやつばかりなんだ．．．たく。とにかく手早に洗い物を片付けていく。」

「．．．．．」

「って今度はなんだよ」

「いや．．．京谷くんほんまなんでも出来るなあって．．．」

「まったく男のクセに腹立つよね。一騎も料理作るのバカみたいに上手いし。こないだだってフランス料理フルコース作ったんだよ？」

「マジで！？俺それ初耳だぞ！？」

「うん、京谷とカルト、セレナが任務で出てたときに一騎が”あいつがない内に美味しいもん食わせてやる”って」

「．．．あいつ俺がいない間に．．．。なんか最近俺に対する態度に疑問を感じないわけではない。」

「まあまあ、喧嘩するだけ仲ええゆうし．．．」

「いっつもなにかしらぶつかってるような気もするけどね。まあ一騎は作るだけ作ってまた厨房に籠ってただけ」

「ってどんだけバカにする気なんだ俺を」

「後で聞いたら”フランス料理大嫌いだからな”って言った」

「食えもしないのに料理法身に付けるなよ。」

「でも食わんのに作れるんやね。なんでやる？」

「それは気になるな」

「アリスが出し惜しみする前に俺も知りたいと告げておく。アリスは

ツンデレ属性があるだけあって気まぐれだから、みんな知りたいたい
言う雰囲気を作っておかないと絶対に聞き出せない。

「って京谷がなんで気になるのよ」

「そりゃあ気になるだろ!？」

「いやいや．．．一番近くにいたアンタが気づかないってどうなのよ」

ますます意味が分からない。俺が一番知っている？

「ほら、一騎の研修期間。みんなになかなか馴染めなくて書庫読み
荒らしてたでしょ」

「あぁー．．．あつたなあそんな時期」

一騎と優希がラウンズに入ってから研修期間、ずっと二人はみんなに馴染めなかった。研修期間の終わりかけによく馴染め出したのだが、それは割愛する。ともあれ、待機時間の間は2人して書庫に籠っていたのだ。たまに俺が様子見に行つて話しかけたりもしたが全部無視された。腹立たしくなつて、セレナ、紫苑と一緒に一騎が読んでる後ろに机を積んで派手にひっくり返すイタズラを敢行したが、やはり無視だった。今思えばその集中力が一騎の強さを物語っているなと今更ながら実感している。事実、俺が研修期間中に仕込んだ”斬魔術”を完璧にマスターし、更に自分のオリジナル剣術まで編み出した。特にあいつの”龍の咆哮”に似た技．．．あれの破壊力は最早．．．

「ってボヤツとしないでよ京谷!」

アリスに蹴りを入れられ我に返る。いかんいかん、つい考え込んでしまった。まあなんだかんだで皿洗いは終わってる。

って終わったなら蹴るなよ。

俺は手を拭きながらエプロンを外す。その後をはやてがにやにやし
ながら付いてきた。

「どうしたんだよ、はやて」

「さっき一騎くんのこと考えてたやろ」

「考えてねえ」

「私は分かるでえ？一騎くんの事話してるときどっか嬉しそうやも
ん」

「やめてくれ、気持ち悪い」

俺は手早く片付けると自分の執務室に向かうことにした。どちみち
仕事溜まつてることには変わらない。とと・・・

「そついやはやて、一騎に荷造りの事言ったのか？」

「ううん、言っていないよ。今から言いに行くところ」

「そついや模擬戦してるんだよな。ちよっと様子見るか？」

「せやね」

近くの休憩室に入り、端末を操作して一騎らがいる訓練室のモニタ
ーを開いた。そこに映し出されたのは、とても子供には見せられな
いものだった。

- v i e w k a z u k i -

ギインッ

「．．．！！！」

「くっ．．．！！！」

これで何度目の鏝迫り合いだろうか。というかどれだけの時間が経ったのかすら分からない。分かるのはお互いが非常に消耗していることだ。

「はあ．．．はあ．．．なかなかやるな．．．一騎．．．」

「シグナムこそ．．．」

そして再び烈火を纏わせたレヴァンティンで斬りかかってくる。すでに俺は握っていた刀を黒龍に切り替えている。それを受け、そのまま切り抜ける。

「甘い！！！」

すかさず返し刃。すぐさま体を反転させて刀を縦にして受けた。

「さすがだな、一騎。だがそこまで無茶な行動は無駄に体力を使うだけだぞ」

「分かってる．．．さ！！！」

刹那の隙を突いて一気に離れる。そして刀に魔力を込めた。

「閃魔．．．飛光撃ッ！！！」

稲妻に似た、魔力の光刃がシグナムに直撃し爆発した。しかしその煙の中からシグナムが現れ、剣を向けた。

「吼える蛇 丸!!」
「絶対ネタだよな!?!」

こいつはシユランゲモード・・・レヴァンティンが分離し、そのまま降り下ろしてきた。

「くっ」

さすがに初めて戦うタイプだ、軌道を読めなければ意味がない。

「そおら餌だ!!」

「だからネタだよな!?!」

そのまま右薙ぎに振り払ってくる。攻撃する度に某パイナップル頭の赤髪死神の真似してるのは気のせいじゃないだろう。

「逃げているだけでは勝てんぞ!!」

そこで一旦戻し、再びレヴァンティンを伸ばしてくる。俺は右に体を反らしてかわし、そのまま突貫する。

「ちっ」

シグナムはすぐさまレヴァンティンを戻し、袈裟懸けの一撃を受け流し、さらにその力を利用して反撃に転じた。さすがに俺は避けられず、右脚を斬られる。もちろん非殺傷設定なので体に傷はつかない。

俺はそのまま後ろに下がり、間合いをとる。シグナムも少し間合いを取った。

「ふむ、そろそろ魔力の限界だな・・・」

シグナムが呟く。たしかにこちらもかなり少ないし、おそらく次がラストショットになるだろう。

「では、己が叩き込める最高の一撃を斬り結ばせようではないか」
「・・・ああ」

俺はそう言っただけで刀を構え、魔力を斬る力に変換し、そして収束させた。シグナムもカートリッジをひとつ炸裂させ、レヴァンティンに焰を纏わせる。

「破魔・・・」

「紫電・・・」

「竜王刃ッ！！」「一閃ッ！！」

2つの巨大な魔力が凝縮されたお互いの一閃が真っ正面から衝突する。

「ぐっ・・・！！！」

「はあああああ！！！」

俺は渾身の力でシグナムを払い飛ばそうとする。だが、シグナムは口の端をつり上げた。

「まだ青いな」

そう言うと竜王刃を同じ力で流し、そのまま俺は返し刃で弾き飛ばされてしまった。

「ぐあつ!?!」

訓練室の壁に思いきり叩きつけられる。すぐにリカバリーしようと竜王刃の二射目に入ろうとしたが、魔力が収束が出来なくなっていた。

「魔力エンプティだな。強引な切り返しや瞬間的な高速機動の使いすぎだ」

シグナムはそう言いながら、レヴァンティンの切っ先を俺に向けた。もちろん為す術がないので降参である。

「はは．．．まだまだ俺も甘いな」

「いやいや、最後の一刀は良かったぞ? まあ甘いところだらけだが」「厳しいな」

愛想笑いを浮かべながら、訓練室を出て優希となのはの元に向かう。

「戻ったぞー、ってなんでふたりしてがたがた震えてるのさ」

「だ．．．だってだって．．．」

「?」

「なんなのアレ!? お兄ちゃん達よく生きてられるね!?!」

「あ、ああー．．．」

シグナムが成程といったように声をあげる。どうやらあの戦闘が恐怖対象に映ったらしい。

「いやいや、優希たちもそれなりな戦闘をしていたぞ?」

「だからって普通に吹っ飛ばす戦闘ってどうなのよ!?!」

優希が涙目になって反論する。

「あっはっはっ、可愛いな優希は（なでなで）」

「シグナムさん撫でて誤魔化さないでくださいっ」

なのはあはは．．．と愛想笑いを浮かべながら、シグナムと優希のやりとりを見ていた。

「あ、ちょうど終わったみたいなんやね」

「あ、はやてちゃん。どうかしたの？」

「一騎くんに用が．．．って怪我凄いな!?!シグナムも!?!」

「すみません、つい模擬戦に熱が入って」

「そっかあ。なのはちゃんや優希ちゃん、一騎くんもお疲れさまや」

はやてはあっはっはっと笑いながら俺たちの健闘を称える。やはり社交的なんだなと俺は思った。

「それで主はやて。一騎に用事とは？」

「ああ、せやったな」

そういつてポケットのなかをぐそぐそ漁るはやて。そしてひときれの紙を俺に手渡してきた。見ると、洗面器具や下着三日分などと書かれている。

「これは？」

「今回の盆休み旅行に必要なブツやな」

「なるほど、これを俺と優希の用意すればいいのか？」

「自分のだけでええよ？さすがに女の子の荷造りするのは男の子がするのはどうやるか」

「確かになあ．．．」

「ねえ、はやてさん」

「ん？なんや優希ちゃん」

優希がはやてに質問を投げ掛ける。なんだろう？

「持参物にWiiがあるけど」

「それは旅館でスマブラのガチバトルするためや」

いやいやいやいや、なに著作権に関わるもの引っ張り出してるんだよ。

「ちなみに負けたやつ罰ゲームな」

「やつぱりやるのかよ」

「はやてちゃんらしいねえ・・・」

しかし罰ゲームか・・・。ちょっと期待するな、うん。

「まあどんな罰ゲームにするかはまだ秘密な」

「だね、お楽しみは最後にだよ」

「そうか・・・」

「さ、体も汚れていますし早めに帰りましょう」

「せやな」

「だね」

シグナムの一言でみんながいる食堂に歩を向けた。その後は幾分か雑談した後、各々の隊舎へ転送帰還しオフシフトとなった。

日が進み、ここは俺と希来の部屋。二人して明日から行く九州旅行

に持って行く荷物の確認をしていた。

「いやあ、明日から旅行だね。楽しみだなあ・・・」

「そりゃあなにも考えなくて良いならな」

「あはは・・・一騎は皆のまとめ役やらなきゃならないもんね」

「・・・つたく京谷さんのやつ・・・」

ぶつくさ言いながらも、荷物を纏めていく。

「そーいや、魔力エンプティ大丈夫なの？」

寝る前なので、大人モードになっているアルルが問いかける。大小変化自在ならそのまま居てくれたらいいのにとか思わないでもない。

「ああ・・・明日要らんことしなきゃ大丈夫だろ」

「だよねえ。ま、んなこと言ってたら面倒事に巻き込まれるんだけど」

「止めてくれ、ゾツとしない」

「あはは・・・」

そう、こいつが嫌な予見をする度にバツチり当ててきている。正直なところなにか大きいイベントがある前の日はとっとと眠らせた方が良いのだけだ。

「でも、楽しみだよな」

「・・・ああ、そりゃあ年が近いやつら・・・それも女の子と一緒に行く旅行だ。楽しみじゃないはずない」

そりゃあ曲がりなりに男の子なんだから、そっちの事も少しくらい

は期待してしまう。まあ、正直なところ期待するだけ無駄だと思っているため、今回の旅行はうんと羽を伸ばすために使おう。

「．．．よし、これで準備完了だな」

「お疲れさま」

「じゃあ寝る？二人とも」

「うん」

「ああ、万が一があるから早めに寝よう」

荷造りも終わったため、手早く寝る支度を整えて床についた。アルルは俺の隣で大人モードで寝ている。

だからやめなさいと。

ま．．．明日からの四日間が有意義になればいいなと思いつながら、意識を闇に沈めた。

Rewrites：魔王VS妹 俺VS烈火の騎士（後書き）

一騎「なかなかいい感じだな」

作者「ここから急転直下話が進みだすんだけど」

シオン「作者さん・・・ねたばれダメ」

作者「おっと、すまん。というか・・・頭悪いな私」

京谷「いまさらか」

作者「あとで覚えてろよ・・・さて、読んでくれた方には無上の感謝を」

一騎「ここまで読んでくれた人は次も読んでくだされば幸いです」

作者オリジナルキャラ設定

京谷「いきなりかよ。まあいいけど」

作者「や、紹介はしないとだよな？」

一騎「だいたいインスピレーションでわかるだろ。いちいち話すこともないと思うがな？」

命「えー……」

作者「まあ。今のところ京谷の能力の異常さが際立ってますけど、そのところ主人公の一騎さんはどのように？」

一騎「これはキャラへのインタビューなのか？」

作者「ただの文字稼ぎ」

一騎「死ね」

命「わたしはそこは気にしないかな。だって敵に勝てばいい話だし」

シオン「そんな簡単で……ええんかい？（びしっ）」

作者「まあいいや。じゃあ一騎の設定からチエケラ！」

名前：桜井 一騎

身長：164

体重：58

魔力ランク：古代ベルカ式空戦S

デバイス：アルテマウェポンⅡ？（ドゥーエ）＋????

武器は黒身の刀『黒龍』&白身の刀『白龍』

性格：冷静なように見えてけっこう熱血型。カッとなってもそれなりに理性的。

見た目：ガンダムWのヒロの目をそこそこ穏和にした感じ。趣味は自爆なんてことはない。

一騎「?????てなんだよ。つかいきなりS+ってのもたいがいチートじゃないか」

作者「シグナムに負けたくせに。というかテメーが一番ビジュアル決まらなかつたんだよ。ざけんなよ畜生が」

京谷「つか一人で2個のデバイス持てたか?・・・まあはやてがそっただが」

作者「ネタバレになるので言いません!!次ッ」

名前：月城 命

身長：155

体重：45

魔力ランク：近代ベルカ式陸戦AA+

デバイス：槍型アームドデバイス オベリスク

性格：明るくはつらつ。凶太い性格。

見た目：はやての髪型に長いテールを付け加えたような感じ。シングルテール。横髪ははやてより長い。

京谷「けっこうまんまだな」

作者「ちなみに原案時にはおとなしい女の子の設定だったんだけどね。。。いったい何があったのか。次！」

名前：星川きさら

身長：130

体重：25

魔力ランク：古代ベルカ式陸戦A+

デバイス：グローブ型アームデバイス デュナミスケイル？

性格：男勝りでモノをはつきりと言う。実は繊細？

見た目：魔法少女きららとさららのきららをもつ少し幼くした感じ。

名前：星川さらら

身長：130

体重：26

魔力ランク：ミッドチルタ式空戦A+

デバイス：弓型インテリジェントデバイス テーレウェイ&ビュ
ロン？

性格：物静かでおとなしい女の子。しかし切れると怖い。

見た目：魔法少女きららとさららのさららを少し幼くした感じ。

作者「現時点では数少ない幼女姉妹。これからいろいろ楽しみですね」

京谷「ロリコンか!!」

一騎「変態だな・・・」

シオン「そういえばなれ初めとかどうなんでしょう?」

作者「本編が方着いたらやりますよ。次」

名前：シオン・E・グラキエース

身長：168

体重：53

魔力ランク：ミッドチルタ式空戦S+

デバイス：杖型インテリジェントデバイス アイシクルエッジ

性格：物静かな大人の女性。メンバー中一番精神年齢が高い。

見た目：ボカ口の弱音ハク。

シオン「・・・なぜかしら。ものすごくバカにされた気分・・・」

京谷「うおっ!?!なんかこのあたり寒くなってるないか!?!」

一騎「オーバードライブ暴走が始まってんぞ!?!」

作者「落ち着けシオン!!とりあえず連続で次!!」

名前：羽田 希来

身長：159

体重：53

魔力ランク：近代ベルカ式空戦AA+

デバイス：剣型アームデバイス アロンドナイト

性格：心優しい性格。戦いや日常でもそれは変わらず。でも芯はしっかりしている。

見た目：ガンダムSEEDのキラ。

名前：桜井 優希

身長：147

体重：40

魔力ランク：ベルカ寄りハイブリッド式空戦AAA

デバイス：双剣型アームデバイス ルナティック&サンライズ

性格：すこしあまえたがりな性格。明るいはうだが弱気なところも。

見た目：そらのおとしもののイカロスの髪の色を明るい茶髪にして瞳はたれ目ではなくふつう。

京谷「こんなものか」

一騎「京谷以下お借りしたキャラについては割愛させていただきます。ご了承ください」

優希「でもこれってそこそこはぶいているよね？」

作者「よく気づいたね。だけど、ネタばれになるから私は絶対言わないから！」

一騎「まあ当たり前だな」

シオン「・・・共演依頼とか来たら面白そう・・・」

作者「気がはやいな!？」

希来「あはは・・・じゃあ今日はこの辺で。更新、楽しみにしてくださいね」

R e w r i t e 4 : 最強の魔導師(前書き)

命「おお？なんか意味深なタイトルだね？」

作者「ここからが本番だよ」

一騎「今までののはつかみ・・・と」

作者「そゆこと ではお楽しみあれ！」

R e w r i t e 4 : 最強の魔導師

そして朝。ミッドチルタの国際空港に俺と優希、希来、セレナ、そして命は来ていた。

「おっせえな」

「一騎が早すぎるんだよ」

命が目を擦りながら答える。確かに2時間前に来たから早いのだ。なんでこんなに早く来たかというところ。

「「んーまーいーっ!」」

国際空港限定パンを食いたくて仕方がない優希とセレナのためにわざわざ早く来たのだ。まあ美味しそうに食べてくれるので、ちょっと嬉しい部分がある。

「一騎ってなんだかんだで可愛い女の子に甘いよね」

「そうかあ?」

「うん、ぶつきらばうだけと思いやり持って行動できてると思うよ」

「おかしいなあ!? 可愛いのに優しされた覚えはないなあ!?!」

「なんでお前に優しせないかんだ」

「ひど!?!」

「あはは...」

命の雄叫びを軽くスルーして携帯で時間を確認する。ふむ、後20分くらいか? そう思った頃、向こうから見覚えのあるシルエットが近づいてきた。エース三人娘とリインフォース? である。

「あ、みんなおるやん。おっはよ〜」

「おはようです」

「おはよう」

「お．．．おはよう、一騎にみんな．．．」

朝から元気がいいものである。こちらも各々に挨拶を返した。

「いやあはやいなあ」

「まあ、あそこの天然娘がここの”スペシャルセレクト改”を食べたい言うから仕方なくな」

「なんか凄そうな名前つけとったら売れるだろ的な意図が丸見えやね」

「実際美味いみたいだぞ」

「一騎くんら食つとらへんやん」

「俺らは白飯派だからな」

「えー」

とまあ、そんな他愛のない会話をしながら待機時間を過ごす。さて、そろそろ時間だな。

「んじゃ、機内^{なか}行くぞ」

「はあーい」

俺を先頭に入場ゲートへ向かう。ミッドチルタ国際空港は無駄に広いため、いちいち気をかけながら歩かねばすぐに迷子になりかねない。なので、俺は皆の歩調に出来るだけ合わせて歩くことを心がけた。

「ほえー．．．」

「ん？どうかしたの、優希ちゃん」

辺りを見回しながら歩く優希にセレナが話しかける。

「いえ．．．こんな大きな空港、私初めて来たんです。ですから色々初体験で」

「初体験．．．エロい響きやなあ．．．」

「はわっ!？」

「ちょっとエロい方向持ってかないでよはやて!」

「そ、そうだよっ!そ．．．そういうのは．．．ねっ、夜に．．．」

「は?なにゆうてんねん?」

「ええ!?そっちじゃなかったの!？」

「そっちもなに勘違い．．．はっはーん．．．フェイトちゃんエロいなあ、一騎くんとくんずほぐれつなこと考えてんねや?」

「だから違つよお．．．/ /」

「あっはっはっ、分かってるでえ耳年増ちゃん」

「(ポヒュー/ /)」

「ん、じゃ搭乗券出せよ．．．ってフェイトお前無茶苦茶顔が赤いぞ!？」

フェイトの顔が耳まで朱色に染まっていた。俺が先導している間何があったというんだ!？」

「あ．．．赤くないもん．．．/ /」

「そつか、なら俺が手鏡見せてやるから」

俺がどこからともなく出した手鏡を覗き込むフェイト。

「林檎．．．みたい．．．/ /」

「ん、分かったならとりあえずゲート潜るぞ、はやても」

「う、うん」

「りよーかーいー」

そうして異物チェックのゲートを潜って改札。次元航行機の機内に入ると既にセレナらが席に座っていた。

「おつそいよ三人とも．．．」

「悪いな、はやてがフェイトを弄りて」一騎くとフェイトがいちやいちゃしてたからなあ（ニヤニヤ）って被せんな！！」

「嘘．．．私がいながら浮気だなんて．．．」

「俺と命はいつデキたんだ！？」

「うわあー一騎くんフェイトちゃんじゃ飽き足らず命ちゃんも美味しくいただいてんねんなあ（ニヤニヤ）」

「え．．．私、一騎に．．．／／／」

「いただいてねえよ！あとフェイトも悪乗りするな！！」

「あつはつはつ、なんや一騎くんツッコミ凄いエエなあ」

「だよね、はやてちゃん」

「ああ！？一騎飛び降りようとしたらダメだよ！？」

離してくれ希来！！俺はこいつらの面倒を四日間見れる気がしないんだ！！

「お兄ちゃんはクールな時とそうでないときの差が凄いなだよ」

「あー、だよねえ。特に京谷とアリス相手の時はキャラ壊れやすいかも」

席では優希とセレナが冷静に分析を行っていた。それはそれで妙に腹立つ。

「一騎に．．．／／／」

まだ引つ張るかフェイト。

正直な話、こんな連中だけでよかったと思う。理由？そりゃ・・・めんどくさいやつが円卓の騎士にはいっぱいいるからな。

まあてんやわんやあったが空港を出ると、みんなして爆睡しだした。俺を除いてみんな寝てしまったので全くすることがない。しようがないので今回向かう場所について説明しておこう。

これから5時間の旅を経て向かうのは、なのはの生地である管理外世界地球の日本。その中の九州地方と呼ばれる島国の大分という場所に最初向かう。

初日の日程は空港に降りてからまずはバスで旅館へ。それから地獄巡りをして旅館に戻って終了、といった感じだ。まあありきたりな観光名所巡りだが、こういう旅行も悪くはない。まあ今までの旅が京谷さんの気まぐれでとんでもない世界に行ったり、あてのない放浪だったりしたのもあるのだが。

『これより、本機は安定航行に入ります。シートベルトは・・・』

・・・と、どうやら安定航行に入ったようだ。みんな寝てしまったので、しょうがなくベルトを外して売店へ向かう。飛行機と違って本当に揺れがないため、わざわざ売り子が歩いてくることがないのだ。

「いらっしやいませ、ご注文は？」

「鮭おにぎり3つと伊右衛門で」

「かしこまりました、小計600円になります」

代金を支払い、焼津鮭のおにぎり3つと某飲料会社の伊右衛門を持って自席に戻る。うん、やはりおにぎりは鮭に限るな。

席に座り、包みを外して一口頬張る。パリッとした焼きのりとふっくら炊きの白飯。そして、脂の乗った鮭切り身のコラボレーションは絶妙な味を醸し出す。程なく食べ終えたところで、俺は誰かの視線に気づく。ちょうど寝起きのセレナである。

「じー．．．」

どちらかというところ、俺ではなくて俺の手中にある鮭おにぎりを注視しているようだ。思えばこいつは大飯食らいだったな。

「お腹空いたなあ」

と、猫撫で声でおねだりするセレナ。こいつは間違いなく俺のおにぎりが欲しいがための行動だ。

「自分で買ってこいよ」

「お腹空いたなあ．．．」

「だから買ってこいって。たかが150円くらいちよちよいのちよいだろ」

「くれなきゃフェイトを美味しくいただいたって噂流すから」

「．．．わかったよ」

くっそなんでたかがおにぎりくらいで人生左右されなきゃならないんだ！？新入りだからラウンズ内からの弄られ率がハンパない気がする。

「うまうま」

俺からおにぎりを奪った本人は美味しそうにそれを食していた。満面の笑顔で幸せそうに食べるもんだから、怒る気にもなれなくなる。

「しかし、朝スペシャルセレクト改を食ったときながらまだ食うか」
「一騎も私が朝バリバリ食べるのは知ってるでしょ？私、召喚士とは言え、前衛向きの能力だから」

俺はああー、という風に頷いた。そう、忘れがちだがこいつは氷の三龍帝とかいう龍召喚を使いこなすくせに、短槍を扱う変則の魔導師だ。本来なら後衛型のはずなんだが、後衛型の重要スキルの射撃は威力はあるが誘導が下手で、攻撃補助・防御に至ってはそこら辺の後衛型魔導師と大差ない。しかし近接戦闘ともなればきららを圧倒し、命と張り合える実力がある。このアンバランスな能力を持ったのがこのセレナ・チェリカールと言う魔導師なのだ。

「そついやさ」

セレナが思い出したように口を開く。

「一騎のデバイスってなんなの？私、全然見た記憶がないんだけど」
「俺の？アルルだよ」

「ユニゾンデバイスじゃなくて、普通の。アームドかインテリジェントとか」

「ああー．．．ねえよ」
「え？」

「俺の黒龍と白龍は、一応魔力媒体の適正があるからな」

俺の刀は特定の工程を経た、非常に特殊な造りの刀である。本来なら全身黒、全身白なんていう都合のいい刀は質量兵器としてのそれで作れるはずはないので、必然的に古代遺産扱いされる。しかし、

こうして自分の武器として保有できているのは京谷さんのお陰なので、そのあたりは感謝している。

「ふうん．．．純白と純黒の刀かぁ。黒龍だけ持ってたら一騎は黒ずくめの男と大差ないわよね」

「．．．言っな」

「ふふ．．．でもありがとね、おにぎり。美味しかったよ」

そう言っつて、にこつと笑うセレナ。天真爛漫組ならではの無邪気な笑顔である。俺はそれをぼんやり眺めながら、ボトルのキャップを開ける。

「ありゃ、お茶も買っつてたんだ？私持っつてきてたのに」

そう言っつてセレナはバッグから生茶を出す。確かに俺が好きな類いの茶だ。

「なら言えよ．．．まあ、寝てたから言えないだろうっけど」

伊右衛門を口に含みながら言っつ。すると、セレナはまったくすくす笑い出した。

「なんかおかしいか？」

「別に、後先考えないのは一騎らしいなっつて」

「はぁ？」

そう言っつてまったくすくす笑い出す。まったく意味がわからないな。

「旅行、全力で楽しもうね」

「．．．ああ」

それから二人してくすくす笑い出してしまった。
だが、これからの旅行で惨劇が起こることはまだ俺達は欠片ほども
理解していなかった。

「んーっ、はあっ」

空港エントランスから出た瞬間、命はんーっと背伸びをした。
ちなみに今の時間は、俺がセレナからおにぎりをぶんどられて三時
間ほどが経過したあたりである。五時間という長旅のためか、みん
なして屈伸や伸びを延々繰り返していた。

「やっぱり長旅は体に堪えるねえ．．．」

肩のストレッチをしながら、まいったという風に希来が言う。

「まったくだ．．．なっ」

俺も前屈をしながら答える。正直、エントランス前でひたすらスト
レッチしてる集団は傍目から見たらただの変質者だろう。

一足早く終えたはやてらがちよつと困った顔をしながら呟く。

「そろそろ移動せえへん？」

「ん、そうだな．．．」

「あつちにバス停あるよ」

優希が指し示す先にはバスがあった。．．．って!!

「急げお前ら!!あれ別府行きのやつだ!!」

「ふ、ふええ!?!」

「みんな行くよ!」

「え、あ、ちよ!?!」

俺の掛け声で、全員で荷物を抱えて全力で走り出す。き、キツイ・

・!?!

「まもなく発車しまーす」

つて出る寸前かよ!?!万事休すか!?!

「任せて」

俺の横で命が呟く。それを聞いて俺が命の声がした方を見たときには、命の姿はすでにバス停にあった。

『ちよつとだけ待ってもらえますか?』

『ちよ!?!あなたいつの間に』

『きにしちやメツ』

『いやでも唐突に』メツ!?!』は、はいい!?!』

命のお陰でバスは待ってくれるようだ。俺は無言で命に近づく。

「えへへー、待ってくれるって痛ったあああああ!?!?」

「てめえ魔法とかが認知されてない世界で普通に”響転”^{ソニード}使っ
てんじゃねえよ!?!」

「まあまあ、一騎くんもそんなに怒らなくていいじゃん。結果的に
は命ちゃんのおかげで間に合ったんだから」

「なのは・・・お前事の重大さがわかってねえな」

天才と呼ばれる連中にまともな奴はいないのかと思うと、ゾツとする。

「以後慎めよ・・・つたく。ただでさえお前は色々ごつちやな奴なんだから」

「そりやおま、召喚士の母と吸血鬼の父を持つたらこんなアンポンが生まれるでしょうに」

命はなにを今更、といった風に反論する。

命は吸血鬼の父、召喚士の母を親に持つ稀なハーフの少女だ。しかし、命父は吸血鬼の亜種であるため、あまり糧として血液を必要としない。それでも一応必要なため、たまに俺に血をせがんでくるのでたまに吸わせているが。

ともあれ命は人より身体能力が高いため、その利を生かし竜騎士として技を磨き続けている。召喚士としての適正もあるらしいが、本人曰く「対話と同調がだるいから多分使わない」とのこと。

「つたくなんでもありだな、お前は」

「チートが前提の主人公キャラには言われたくないよ（笑）」

バスに乗り込みながら、他愛のない口論を命とする。こんなのをよく飽きもせず毎日続けられるなと我ながら思う。そこへセレナが突然爆弾を投下する。

「とうかさ、命って器用貧乏って言葉が似合うよね」

「うっ」

命がそれを言うな、といった恨めしそうな顔でセレナをみやる。希

来がそこに口を挟む。

「そうだよねえ、料理や裁縫、なんでも出来るけど特別これは……
つてのはないよね」

「希来まで!？」

「そうだよ、料理ならシオン。裁縫ならさらら。掃除洗濯はアリス
に軍配が上がるよ」

「さしずめジムカスタムちうとこやな」

「……………」

はやての一言が完全にとどめを刺した。命はずーん、とつつむいて
しまう。それを必死になのがフオローする。

「で、でもさ!なんでも出来るつてのはいいことだよ!？ほら、巨
人のキムタクみたいなさ!!」

「野球選手と比べられても……………」

だが誤爆。なのはの慰めは余計に命をしゅんとさせた。俺としては
そんな野球選手を知っていたなのはに尊敬の拍手を送りたい。

「それでさ……………これはどこ向かってるの?」

気を取り直した命が聞いてくる。俺は他の一般人に見えないように
情報端末を開いた。慣れた手つきでそれを操作し、これからの日程
表のフォルダを展開する。

「まずは旅館の悠水亭に行って荷物下ろし。んで、近場のレンタル
サイクルで自転車を借りる。んなら地獄巡りして今日のアレは終わ

りだな。まあ．．．時間的な余裕はないから三つ回れたらいい方が
「あ、あの青い湯が沸いてるところは行くんだよね!？」

優希が食いついてくる。どうやら普段見慣れないものには興味津々らしい。

「ああ、んで間欠泉のやつと湯気が凄いとこはいくぞ」

「えへへ、楽しみだなあ」

目を輝かせる優希。キラキラトーンが背景に見えるのは気のせいでありたい。

「で? レンタルサイクルまでは?」

「一時間ちよいか」

「じゃあさ、私と一騎とはやてとフェイトと希来で古今東西しない?」

セレナが暇潰しにそれを提案する。古今東西はお題に沿った名詞を言っていくゲームだ。雑学や記憶力を試す遊びだな。

「罰ゲームは?」

ちよつと乗り気で聞いてくる希来。

「負けたら猫口調ね。男はメイドで。それじゃあ行くよ」

まてまてまてまてって始まりやがった!!

「セレナから始まるっ」 セレナのコール

「「「イエーツ!」「」」 (俺以外の合いの手)

「古今東西っ」

「『イエーツ!』」

「【は】から始まる言葉っ」

”は”からか。さて・・・

パンパン（手拍子） セレナの番

「ハンドガン」

パンパン（手拍子） 希来の番

「えと・・・ハリウッド!」

パンパン（手拍子） 俺の番

「handsonic」

「一騎の負けー」

「なんでだよ!?!」

「一応”は”から始まってるじゃないか!! 某天使ちゃんの武器だぞ!?!」

「著作権に関わるものはチヨメで」

「この小説の根底を覆さなきゃいけない発言だぞオイ」

セレナから世界的前提を壊しかねない発言が飛び出す。少し自重すべきところである。

「まあ約束だからメイドね」

「くっ、わか・・・分かりました、お嬢様」

く．．．、屈辱だ．．．！！

「じゃあネクスト。負けたやつは語尾にゃんよね。それじゃあ行くよ」

また著作権に引つ掛かりそうな罰ゲームである。それはネタじゃないかと思ってしまう。

「セレナから始まるっ」

「『イエーツ！』」

「古今東西っ！」

「『イエーツ！』」

「AKB48の歌っ」

．．．は？

パンパン セレナの番

「RIVER！」

パンパン はやての番

「ヘビーローテーション」

パンパン フェイトの番

「私の負け．．．」

「ひとつも思い付かへんの!？」

「国民的アイドルグループだよ!？」

全く思い浮かばなかったらしいフェイト。仲間がいてよかった．．．マジで。メイドで某戦線の野球少年口調は鬼畜だ。

「で、でも他の人も思い付かないよね．．．？」

フェイトは周りの皆に同意を求める。

「僕はわからないかな．．．」

「興味がありませんから」(俺)

「お兄ちゃんが聴いてないから私も聴いてない」

「私は家族が聴いてるみたいだから聴いてるよ」

「よかった．．．聴いてない人いたよ」

胸を撫で下ろすフェイト。が、安息は束の間だった。

「じゃあ語尾にやんよね」

「は、はいやんよ．．．／＼」

正直に言おう、似合わない。

「って、セレナがやったら難しいのばっかしか出てこないやんよ！？」

フェイトがセレナに反論する。が、セレナはしれっと言い負かしてきた。

「単なる勉強不足でしょ？」

「けれど地球の文化なんてなのはや一騎くらいしかわからないよ！？」

「いや、出身の私もなかなか厳しいんだけど」
「俺は興味がない」

「というか、娯楽がなかったしな。」プラント」は。

そんなこんなで古今東西は続き、結局セレナが圧勝で終わった。フ
エイトに至っては語尾にやんよ、甘えんぼ口調、猫耳力チューシャ、
仕舞いにはセレナが何故か用意していたパールルージュを塗らされ
た。

「．．．」

「どうしたの、フエイト？」

「ふえ！？な、なんでもないよっ」

パールルージュはフエイト的に受けがよかったようだ。

で、レンタサイクルを經由して現在は海地獄に向かっているところ
だ。海地獄は、1200年前の鶴見岳の爆発によって出来たとされ
ている。湯が青いが、摂氏98もあるのももちろん入ろうものな
ら大火傷だが。入った瞬間、目の前の青い色をした湯を見て、優希
は感嘆の声をあげる。

「ふわぁ．．．すごく青い．．．」

「凄いね．．．本当に海みたいだよ」

セレナはやてらもこれにはびっくりなようでもまじまじとコバルト
ブルーのそれを眺め続ける。

「ちなみにそれほぼ沸騰した湯と同じ温度だからな」

「うそ！？」

「だからさわんなって書いてるんだろ」

そう言っつて俺は海地獄について記された看板を指し示した。それを一別してなのはは呟く。

「．．．なんで青いんだろっ．．．」

「さあ．．．」

さすがにそこまでは俺は預かり知らない。そしてふと、俺は竿に吊るされたソレを見つける。

「なんだ．．．?」

「ん?どれや」

はやてが俺の隣に来て、同じく目を凝らす。そして程なく気づいたように、首をかしげた。

「ぎるのなかに．．．卵が入っとるみたいやね」

「蒸し焼きの類いか?」

「かもなあ．．．湯気と水温が凄いさかい、それ使っとるんやろね」

俺はああなるほど、と思った。有効活用とかお土産物確保的なアレなのだろう。

「せっかくだし食うか?」

「え、ええの?」

「たまにはこういうのもありだろ。おーい、お前ら卵いるか?」

今だ興味津々で海地獄を眺め続ける優希たちに声をかける。

「うんー、いるー!!」

「りょーかい。んじゃ、買ってくるな」

「わかったやよ」

俺はそう告げてお土産屋に足を運び、人数分の卵を確保した。そしてみんなで美味しく載っていた頃、管理局で警戒すべき事態が起きたことは未だ知るよしがなかった。

- view kyoya -

「飛天御剣流・・・九頭龍閃ツ」

ここは俺やラウンズが短期的に能力強化をするためにある、『修練の門』。無論俺が作った場所だ。

内部で”ゲイトオブパピロン王の財宝”を使い、氷輪丸を出していた俺は見よう見まねでるる剣の九頭龍閃を放つ。使う度に思うが理屈さえ分かっていたれば一応撃てるようになるようだ。この能力をくれた死神には感謝しなきゃな。

「きょーやー、書類整理終わったよー」

フィオネの呼び掛けに気づいて、俺は声が出した方を向く。

「ああ、わかった」

「ってまた訓練？ただでさえ強いのにまだ強くなるんだ？」

「そりゃあ準備しといて損はないだろ」

修練の門を出て、汗を拭きながらシャワー室に向かう。あそこで訓練すると、ガンガン強くなるのが解る。あの場所は、時間の流れが1日がこちらの世界において一年に相当する。つまり一時間では半月分の鍛練を積んだことになるのだ。まあ隠りすぎはちよつとまづいかな。

「ヴオオオイ！！京谷あ！！」

突然の怒鳴り声に俺はつい肩をすくませる。まあこんな怒鳴り方をするのは一人しかない。

「どうしたんだよ、カルト」

「出向中の紫苑とシオンから緊急通信だ」

「紫苑とシオンが？」

ちなみに読みは同じ”しおん”だから、二人が固まって居るときに呼び掛けると両方反応する。かと言って階級つけたら紫苑がえー、といった顔をするから余計困る。

「分かった、すぐ行く」

俺は手早く制服を羽織って、端末で紫苑らと通信を繋ぐ。すると、少し焦りの顔を浮かべたシオンが応答した。

『京谷ですか？』

「ああ、どうした通信なんざ」

『ええ、紫苑が巨大な魔力反応を感知して向かったのですが・・・』

「やられたのか！？」

悪い未来を想像し、語気が荒くなる俺。しかしシオンは首を振る。

『いえ、戻ってきたには戻ってきたのですが・・・紫苑が手紙を預かっていたみたいで』

そう言つて、懐から一枚の紙切れを取り出す。確かに俺の二つ名”神帝”宛になっている。

「内容は」

『 ”今夜、この世界の西の森で貴方を待つ”・・・だそうですね
「果たし状か。京谷に挑むんざあ、頭イかれてやがるな」

カルトは鼻で笑う。だが、俺は少し引つ掛かるものを感じる。なぜわざわざこうして経由させて伝えなきゃならなかったのか。

「なあ、紫苑から受け取ったときなんかおかしいところなかったか？」

『 おかしいところ・・・ですか？』

「ああ、些細なことでもいいんだ。何かないか」

シオンは暫し考える。やはり思い当たる節があったようであ、そうだと風をぼん、と合わせた。

『何か操られていた感がありましたね。手紙も受け取ったはずなのにいつの間にか持っていた的な』

俺の予感が的中する。何者かに紫苑は手紙を渡すように仕向けられた。ラウンズで四番目に強い彼女が操られるとなると、非常に高ランクな魔力を有していることになる。

が、やはりもうひとつ気がかりなことがあった。

「・・・どうして無傷で返されたんだ？」

俺はある意味管理局でやりたい放題なため、上層部からは畏怖の対象となっている。

脅しやらなんやらなら、もう少し卑劣な手を使ってもいいはず。もしくは俺自身だけに牙を剥いていることになるのか？

「・・・とにかく、俺は向かう。フィオネ、準備だ」
オールライト
「了解」

フィオネはすぐに俺がいつも携行するものを転送して準備した。

「勝てんのか、京谷」

「はっ、この程度勝てなきゃ”神帝”を名乗る義理はねえよ」

そう言って自分自身で転送魔法を使い、紫苑らがいる管理世界に飛んだ。

俺が飛んだ先には紫苑、シオン二人ともがいた。俺を目測するや否や、紫苑は近づいてきた。

「京谷か」

「ああ、まさか操られていたなんてな」

「うむ・・・儂としたことが手玉に取られての。ああ、変なことはされておらぬから大丈夫じゃ」

紫苑はしてやられた、といった表情で自分の失態を悔やんでいた。

「そついや、反応時の推定魔力はいくらだったんだ？」
「・・・聞いて驚くでないぞ」

紫苑はそう前置きし、一拍置いて告げた。

「・・・EXじゃ」

「！！」

魔力ランクEX。際限がない量の魔力を保持し、またそれを意のままに操る戦闘技術を有する魔導師が名乗ることを許される最強の証。それを持つものが、今この世界に存在している。

「実力は少なくとも京谷と同等と見てよいじゃろう。儂が接触した限りでは無法者ではないように思うが、油断は決してするな」

真剣な表情で、真つ直ぐ俺を見て忠告する。

俺の胸中に一抹の不安がよぎる。しかし、直ぐにそれは掻き消された。

『エマーゼエンシー
緊急事態、緊急事態！！西部の森に魔力反応あり！！推定ランク、EX！！繰り返します』

「・・・来やがったか！！行ってくる！！」

「あ、京谷！！」

「待つんじゃない！」

フィオネと紫苑の制止を振り切り、端末で反応地点を検索しながら基地を飛び出す。

反応は西部の森から動く気配がない。恐らく待っているのだろう。俺は全速力でその場所に向かった。

俺が降りれる場所を見つけ、降り立つとそこには楡の木の森が広がっていた。元々やたらでかい木な上、すでに夜なので無駄に迫力がある。

いつ襲われてもいいように、左手には王の財宝で呼び出した”千本桜”が握られていた。

「・・・君が、氷上京谷くん？」

俺はハツとして、声がした方を向く。そこには、ボロボロだが大きなマントに身を包んだ女がいた。無論、声だけでの判断だ。

「・・・だとしたら？」

「力を試させてもらっわ」

そう言い終わる前に、女は俺の眼前に迫っていた。

「っ！？」

繰り出された手刀を仰け反りながらかわし、そのまま蹴りを加える。

が、片手で止められあまつさえそのまま投げ飛ばされる。

「ぐっ．．．散れ、千本桜ッ」

そして千本桜の解放を使用し、女に向かわせる。

「止まって見えるよ、加減してるのかな」

女はそういうと、手刀で千本桜の刃を振り払った。

「こんなもんじゃないでしょ？」

そう言つて再び間合いを詰めてくる。

俺はならば、と刀を手放す。正確には、”千本桜の卍解”だ。

「散れ．．．千本桜景蔵！！」

千本桜の始解では到底かなわない、数億の桜の刃が形成される。

「へえ、やるじゃん」

俺は女に桜の刃を向かわせた。俺の魔力でさらに強化されたこれは、オリジナルよりも遥かに攻撃力がある。

さすがにヤバイと感じたか、女はすぐさま距離を取った。

無論、逃がす気はない。俺は手掌で千本桜の波を操り、女の気配がする方へ向かわせた。

しかし、それでもギリギリで捉えきれない。

「．．．さすがにマズイか。スプリガン」

『a11r1gnt』

女は千本桜の攻撃範囲外に逃げると、デバイスらしきものを手に取りこちらに切っ先を向けた。

「がっかりさせないでね．．．エメトアッシャー」

刹那、膨大な魔力の収束を感じ取った俺は千本桜をかき集め、盾にさせた。と同時に、女の砲撃魔法がぶつかる。

(．．．っ！重い．．．!!)

俺ですら、重いと感じる強烈な闇色の砲撃。

それをなんとか受け止めた俺は千本桜を仕舞い、オーデインが使ったとされる刃”斬鉄剣”を取り出した。

「凄いね、いろんな武器が使えるんだ」

「これが俺の能力なんでね」

俺は隙を伺いながら、女の問いに答える。女は地上に降り立ちながらこう言った。

「．．．じゃ、君の得意なレンジで戦ってあげるよ」

「ッ、なめんなあ!!」

簡単な挑発に乗ってしまった俺は、女の元に突撃する。女は動じず、斬鉄剣をデバイスで受け止めた。

「なっ」

「驚いている暇はないんじゃない?」

そうやって、剣撃を振り払う。

「スプリガン．．．ザンバーモード」

デバイスをザンバーモードなるものに変えた女は俺に迫り、袈裟懸けに振り降ろしてくる。

それをバックステップでかわした俺は、カウンターに入ろうとした。しかし、体が動かなかった。

「．．．バインド!!」

尋常じゃない硬さのバインドが俺を絡め取っていた。そして、女は俺の腹に手を当てる。

「．．．何の真似だ」

「すぐにわかるよ」

女が言った瞬間、腹に形容しがたい衝撃が走り、俺は絶息した。

「私あまり周りを壊したくないときに使う魔法、”シヨック”。これを使えば、自分の最大戦力の攻撃と同等の攻撃力が必要な相手だけにぶつけられる。まあ君にかけたのは手加減してあるけどね」俺は薄れた意識の中、先程の技の説明を受けた。バインドを破ろうにも時間がかかりすぎる。ましてや、大ダメージを受けた後だ。かなり難しい。

「．．．紫苑を操ったのは、テメエか」

「そつだよ、あなたに連絡をするように仕向けたのは私。まあ一触

即発な感じだったから本気で縛って、インプリンティング 刷り込みしたんだけどね。心配しなくても体には負担かからないわよ」

俺が聞きたいことに対し、言うまでもなく答える女。しかし、やはり解せないことがある。

「まあ訳あって管理局の輩共には顔を見せるわけにはいかなくてね。私みたいな魔力の持ち主なら、すぐに反応するでしょうからこの形を取ったのだけだね」

「・・・じゃあどうして俺に接触したんだ」

「・・・力を試すためだよ。奏つちゃんの味方がどれくらいやり手なのかを図るためにね。これから起こる惨劇に対応する力があるのか・・・それを見たかった。君は、13歳にしては称賛に値する判断力と戦闘能力を持つてる。これなら君の下にいる子達も信用できるわね。それじゃ」

訳が分からないことばかりを抜かして、立ち去ろうとする女。

「待て!!」

「大丈夫よ、私がこの世界から消えたらバインドも消えるから」

俺に背を向け歩きながら、そう告げる。俺が聞きたいのはそれじゃない。

「お前の名は!??」

「もしまた会えたら教えてあげる」

それだけ告げて世界から脱出しようとする。が、そうだと言う風に振り替えて口を開いた。

「力の使い方、間違えないでね」

そう言っつて、女は消えた。そしてバインドも音もなく崩れ去ってゆく。

『京谷！！京谷！！』

通信で、フィオネの呼ぶ声がした。すぐさま回線を開いて対応する。

『良かった．．．何故か通信が繋がらなかったから心配したのよ！？』

フィオネは目に涙を溜めながら言う。気づかなかったがどうやら、俺が戦ってる間ここは外界からシャットアウトされていたらしい。

「ああ、なんとか」

『派手にやられてんじゃねえか京谷あ！』

後ろからカルトの怒鳴り声が聞こえる。なんだかんだで心配だったんだろうな。

「大丈夫だよ、なんとかな」

俺は体を動かしながら答える。

『まあお前が死ぬような奴だとは思わねえがな。．．．で、どれくらい強い』

急に真剣な眼差しになるカルト。フィオネや紫苑、シオンも真剣な目で俺を見ている。

「尋常じゃなく強い。お互い力をセーブしていたが、本気で戦っていたらどうだろうな」

それを聞いた途端フィオネ達の顔に影が走る。

『何か言ってた？』

「俺を呼んだのは、力を試したかったらしい。これから起こる惨劇に対応する力がなんとか．．．つてよ」

『．．．何か起こるのかな』

『一種の犯罪予告か？』

「．．．それなら、俺だけに告げる理由はない。それに、俺達と敵対してる訳じゃなさそうだ。かと言って．．．」

そこではたと、何か引つ掛かるものを感じた。

『どうしたの、京谷？』

「いや．．．大したことじゃないんだが．．．あいつの口から局長の名前を聞いた」

『奏さんの？』

「ああ．．．一応、後で話聞いた方がいいかもな」

『そうだね。じゃあ早く戻ってきなよ』

そうして、フィオネは通信を切った。

「．．．惨劇、か」

この時の俺はまだ気づいていなかった。その凶刃が今旅行している一騎らに向けられていることを。

R e w r i t e 4 : 最強の魔導師(後書き)

京谷「……………」

命「機嫌悪そうだね？」

作者「俺が最強だぐへへへへってやつにはいいお仕置きだよ」

京谷「『エヌマ・エリシユ天地乖離す開闢の星！』」

作者「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

一騎「あーあ、作者が死んだ。さて、代わりにこの小説を読んでく
ださった人には無上の感謝を。それでは！！」

R e w r i t e 5 : 湯布院の惨劇 前編

- v i e w k a z u k i -

「.....」

翌朝。俺は重い頭を必死に動かしながら昨日の回想をしていた。

「えーと.....なにがあつたつけ.....」

昨日の記憶をがさがさと漁る。んー.....思い出せない。

『ドカンと一発！（だだだん）いつてみよーおーおー！！』

「うおおう!？」

突然鳴り出したアラームに焦る俺。周りを見渡して音源を探すと、
どうやら音源ははやての携帯だった。

「なんでこんなわけのわからん着信を.....って」

そこで俺は異変に気づいた。まさかまさかと思いつつ周りを見渡すと、
絵面にはなかなか出来ないはやてらの姿があつた。

「.....あ、思い出した。こいつら甘酒で酔つたんだ」

ここで、事の顛末を思い出した。旅館に着いて、あらかたやること
済ませてから予定通りスマブラ大会をしたんだ。で、負けたはやて
が今晚のつまみの買い出しに出掛けて甘酒を買った。それを飲んだ
俺とセレナ、希来を除く全員が酔い潰れて大変なことになった。

ついで野球拳（家禄のある野球拳）をし出して俺は見なかったことにして先に寝たんだ。

「．．．顔洗うか」

そう思った俺は、洗面所に向かい顔を洗う。

水が冷たいので、すぐに眠気は覚めた。そして程なく通信が入る。

これは．．．京谷さんだ。なんだろう？

『一騎か。旅行は楽しんでるか？』

「．．．むちゃくちゃ疲れるんだが」

『ははっ、まあ頑張りな』

「．．．それだけじゃないだろ」

『ああ、そうそう．．．忘れていた』

本気で忘れていたらしい。

『昨日、紫苑らの出向先で魔力EXのやつが現れた』

「本当か？」

『ああ、ついでに言えば俺は戦って負けた』

「．．．！．．．！」

京谷さんを倒す程の実力者。今回の事件は京谷さんを持ってしても
敵しいのだろうか。

『まあ敵対する訳じゃないだろ。力を試したかっただけらしいし』

「．．．」

『で、こっからが本題』

そして真面目な顔で京谷さんは話し出す。

『そいつの話によるとだな、これから少ししたら惨劇が起きるらしい。だから、全員に気を引き締めとけって言っといてくれ。俺達もいつでも向かえるように準備しておく』

「了解した。そう言えば京谷さん」

『ん？』

「・・・浦原貴輔の店って湯布院にあるんだよな」

『？それがどうした』

京谷さんは首をかしげながら言う。浦原貴輔は、ラウンズ御用達の店で管理局やあらゆる世界事情に無駄に詳しい。行き詰まった時にたまに訪れる場所である。

「・・・少し寄っていく」

『ん、そうか。俺から話は通しておくよ』

「ん、了解。他に用件は？」

『んー、今のところはないな。んじや旅行楽しんできな』

そう言つて、京谷さんは通信を切った。俺は端末を切ってから部屋に戻り、周りを見渡す。

いまだにはやてたちは起きる気配がない。妙に浴衣がはだけたりしているため、やり場に困る。

(さて・・・どうしたものか・・・)

俺は起こすより先に、自分の身支度を整えるようにした。手早く衣服を取り出し、サツと着替える。

軽く体を動かしていると、もぞもぞ動き出したやつがいた。フェイトである。

「ん．．．おはよ、一騎」

「おはようさん、酔っ払いその1」

「いきなりそれはやめてよ．．．」

苦笑いしながら答えるフェイト。はやてら程じゃないが酔っていたことには変わらない。

「みんなまだ寝てるね」

「ああ．．．まあ旅行は行き当たりばったりだから別に昼間で寝てくれて構わないけどな」

同じく苦笑いしながら答える俺。せつかくの休みなんだから、こういったハメ外しも悪くない。が、それはあくまでただの休み旅行だけの話であって先程京谷さんから話を聞いたとおり、少し危険な旅行になりつつあることは必ず伝えねばなるまい。

それをいかに伝えるかを模索していたところ、フェイトの他にもぞもぞと起き出す。

「あ．．．おはようやよあ」

「おはよ、お兄ちゃん．．．」

「．．．（むくり）．．．（すぴー）」

「いらいらせれナ」

俺は適当に引っ付かんだペットボトルで突っ込みをいれた。

「．．．（すぴー）」

．．．しばらく放置しよう。そう心に決めてから、部屋のカーテンを開け放った。

外は曇りひとつない快晴。紫外線や脱水症状に気を使わねばならない天気だ。みんなに一本ずつアクエリを買ってあげなきゃな。

「うー．．．頭痛い．．．」

「そりゃ甘酒ゆづてもあんだだけ飲みゃあなあ．．．」

なのはは完全にやられてしまっている。命はまだ寝ているが、気分悪そうな顔をしている辺りこいつも二日酔いの類だろう。

（大丈夫かよ．．．ちよつと大変な事態なのに．．．）

様子を見てため息を突きたくなる。京谷さんがいればなんとかの杖で一発で万事解決なんだろうけど、生憎そんな便利能力には恵まれていない。

結局、全員の体調が万全になる昼まで旅館から出られなかった。

「よし、んじゃ手短に京谷さんから連絡されたことを言っぞ」

ようやくベストコンディションになったみんなを集め、京谷さんから連絡されたことを伝える。今までのおちゃらけが嘘のように、各々真剣な眼差しを向けていた。

「まず一つは京谷さんの方で戦闘があったこと。魔力ランクはEX」

「「「！」「」」

全員が息を飲んだ。驚くのも無理はない。

「じ、じゃあ京谷くんは!？」

「軽傷だ。相手は本気で戦り合うつもりはなくて力を試したかったらしい」

「．．．なんのために？」

なのはが問う。こちらにも戦技教導官としての顔だ。俺はひとつ間を置いてから答える。

「これは二つ目に言いたいことと被るんだが、これから遠くない未来に惨劇が起きるらしい。それに対応するだけの技量があるかどうか、だと思っ」

「けどそれやったらうちらにも刺客は送られるべきやん？」

「どちみち京谷さんから指示が飛ぶんだから大したことはない。で、京谷さんからの指示はとにかく気を引き締めると言うことだ」

「『了解』」「『了解』」

全員が二つ返事で返した。それから、はやてを手で誘き寄せる。

「ん、なんや？」

「もし戦闘がこつちで起きたら、隊長らから指示が来るまでは俺とはやてで仕切るからな」

「うえ、さすがにラウンズメンバーは恐れ多いで．．．」

「はやては指揮官候補だ、資格取りや年上のしたっば持つことだつてあるんだぞ。まあ．．．極力俺が面倒見るようにするけどよ」

あああ、なんで妥協してしまうんだ俺。それを聞いたはやてはにっこり微笑んで、

「ありがとな」

と言った。やれやれ、俺も甘いな。

「とりあえず、この話はおしまいにして・・・今日はどこ回るの？」
話は終わったと判断したのか、フェイトが今日行く場所を聞いてきた。

「ああ、行きたいところがある」

そして、ところ変わって湯布院。大分の観光名所のひとつだ。

俺たちが居るのは由布院駅の前に広がる観光通り。いろいろなお土産屋や有名な食事処やB級グルメが売っており、シーズン中は観光客で賑わう。

また、この通りの公園には日本を代表する蒸気機関車D51が完品で置かれてあり鉄道マニアにはk t k rキタコレな場所でもある。

ちなみに、贅沢にも俺達は直通特急”ゆふいんの森”で来たのはここだけの秘密だ。

「へえ・・・風光明媚な場所だね」

一番最初に降り立ったたのはが感嘆の声をあげた。ついで、降りて

きた連中もおお、といった表情を浮かべる。

「おみやげいっぱい買わなあかね」

「隊長やみんなにもだね」

各々がやりたい事をやあやあ言っているのを尻目に、俺はセレナの
ところに向かう。

「ん、どうしたのかず．．．」

振り向いたセレナを強引に引き寄せて、耳許でこっぴど囁いた。

「にやに!?!?」

「浦原のそこに行く」

「．．．了解。みんなを見てたらいいんだね?」

セレナが最後の台詞を言い終わる前に俺は離れ、右手を挙げてから
立ち去った。

『あれ、一騎くんは?』

『ちよつと下したみたい』

『さよかあ．．．一緒に回りたかったなあ．．．』

『あはは．．．』

よし、なんとかごまかしてくれたみたいだな。

「だらつしゃあー!!」

「・・・掃除しようよ・・・」

サボってほづきを振り回す少年を宥める少女。

「うつせえ!! 鉄斎が怖くて掃除なんか出来るか!!」

「いや・・・怖いから掃除するんじゃ「俺様に口答えすんな!!」
ぐりぐり」痛い痛い痛いよ!？」

「こちらら、なにしてんだガキンチョ。店長は居るか?」

店で働く子供二人が喧嘩しているところに乱入し、仲介する。

「・・・まいど」

さて、ここは浦原雑貨店。表向きはあらゆる雑貨やお土産を取り扱う謎の店だ。値段も良心的で破格の安さを誇る。

というのには表向きの姿で、ご覧の通り俺達ラウンズや異界を旅して回るものには重要な拠点であり、魔法や魔法具、あらゆる世界事情にも精通する。

「む、まだ掃除中・・・」

「しかたねーだろ、こいつが開けるつつうんだから」

少年は筋骨隆々の男、葛飾鉄斎に言い返す。ちなみに、パツと見てラウンズの者だと分かるように制服に着替えた。

それを見てラウンズの者だと分かった鉄斎は、抱えていた荷物を下ろして応対してくれた。

「ラウンズの者でしたか。今店長を起こして参ります故」

「ザーンネン、今日はもう起きてますよん」

と、突然奥から間の抜けた声が聞こえてくる。そこから無精髭を生やすゲタ帽子・・・浦原貴輔はあくびをひとつしながら出てきた。

「おはよ鉄斎、タツキ、雨音。そんでいらっしやいませー騎サン」

「ああ、アルテマウエボン？の調整以来か」

「そつすねえー、あれから使ったんすか？」

「いんや、まだ扱えるレベルじゃない」

「へえ・・・でも、調整はするんすね」

貴輔に言いくるめられ、俺は言葉につまる。

「まあ、そのあたりはキミの扱い次第。さ、今日はなにを御求めで
？」

「ああ・・・ちょっと今俺たちが抱えてる問題に関してだな」

「へえ・・・そんなことになってるっすか」

俺は今までの顛末を手短に話した。貴輔は黙って最後まで聞き、やがて口を開いた。

「魅音……か。懐かしい響きつスねえ……」

「……懐かしい……?」

その言葉に違和感を覚える。すると、後から入ってきた鉄斎も戸をピシヤリと閉めながら呟く。

「まったくですな。私などはかれこれ40年はその名を聞いていません」

「40年……?どういうことだ?」

貴輔は少し間を置いてから、少しずつ話し出した。

「恐らく京谷サンから聞いてると思うんスけど、魅音サンが魔力E Xの魔導師ってことは聞いていますね?」

「ああ」

「……では、稀少技能”闇”の事も?」

「な……!!」

稀少技能、闇変換。それはあらゆる自然属性変換よりも稀少とされている技能で、魔力を闇の力に変換して攻撃するというものだ。

が、管理局の歴史では管理局勤務の魔導師に持っている者はいないとされている。

「……聞いていないみたいっスね。むしろ京谷サンも知らなかったか」

「……管理局ではそれを持っている者はいないとされた」

「そっス。ですが、あくまでそれは表向きの話。今から42年前に

現れてしまったんす。それが下坂魅音っす」

俺は言葉が浮かばない。しかし、貴輔の説明は続く。

「今の魔導師で言えば、高町サンが魅音サンに近いつすかねえ。魅音サンも高町サンと同じように、現地協力者として管理局入りしました。そして余りある魔力の才能を存分に発揮し、程なくEXランクを受けました。しかし、それをある魔物の組織が目をつけたんす。無論、それは管理局も知っていた。けど、上層部は黙殺する方向に決定した」

「．．．どうして？」

「魅音サンは管理局の歴史で初めて、上層部の闇に気づいたんす。管理局の最強の魔導師として名を上げる一方、暇があれば管理局のデータベースを探り、闇を突き詰めていった。それ故に．．．魅音サンはその名を闇に葬ることになったんす」

- view hayate -

さて、買い物はこんなものかな。しかし私らもよう買ったなあ。トロやらジブリやら可愛いものや掘り出し物があるから、ついつい買い込んでしもうた。

一騎くんがおつたら、荷物持ちさせるんやけど．．．。

「まだ帰ってきいへんねえ．．．」

「そうだね．．．」

なのはちゃんと二人してため息をつく。一体どこをほっつき歩いているんだか。

その中、なのはちゃんがふと空を見上げる。

「.....」

「どないしたん？」

「ううん、なんでもないよ」

なんやなのはちゃん。呆けるなんて珍しいなあ。

一騎君の言っていたこと、正直に言えば実感がなかった。そう、至近距離に”ソレ”が現れるなんて。

ズガアアアッ

「「「!!!?!?」「」」

突如北西で爆発が起こる。突然の事態で私たちも反応が遅れた。そして程なく二回目の爆発が起きた。

「はやてちゃん!!」

「わかつとる!!」

私たちはすぐに荷物を捨て、レイジングハートと剣十字のネットワークスを取り出す。

「リイン!!」

「レイジングハート!!」

「セツトアップ!!」

その言葉を唱え私達はデバイスフォームになり、爆発のあった方へ向かおうとする。

「ッ!! はやてちゃん!!」

「!?!」

なのはちゃんの声で反射的に振り返る。

「へへッ死にな」

異形の魔物がそこにいた。

- v i e w k i r a -

「ッ!アロндаイト!!」

魔力弾を10形成して魔物に撃ちつける。着弾と同時に突撃^{チャージ}を仕掛け、頭を割った。

「大丈夫、希来ッ」

「...なんとか!!」

一回目の爆発の近くにいた僕と命は、複数の虫型の魔物と対峙していた。恐らくレディバクというやつだろう。その幾つかは、魔法を放とうと魔力の収束を開始する。

「・・・」ラスオブツヴァイ！！」

ラスオブツヴァイは命の十八番のひとつで、チャージによる乱れ突きた。さらに命の風変換と吸血鬼ならではの瞬発力でバカにならない破壊力を秘める。

もちろん、今詠唱に入っていたレディバクは全滅させた。

「そこっ」

僕は間合いを詰めて、一息に三度斬る。一騎や隊長みたいに神速の斬撃は繰り出せないが、連撃には自信がある。

「一騎・・・どこいったの!?!」

命は怒鳴りながら、次々現れる魔物を蹴散らしていく。しかし、その一匹を撃ち漏らしそいつは一般人の元へ向かっていく。

「しまっ」

「ラウンドシールド」

が、間一髪誰かのシールドによって防がれた。

「行くよ、ジーク」

『了解ッ』

彼女は短槍ジークフリードを自在に操り、次々現れる魔物を蹴散らしていった。

あらかた倒したところでようやく彼女・・・セレナは口を開く。

「こいつら・・・何者なの?」

「分からない．．．けど、明確な敵意を持つてるね」
「！あそこ！！」

命が指差した先で、空が異常に沈んでいる。
いや、歪んでいるといった表現が正しいのかもしれない。
そして、その近くに優希とフェイトがいた。

- v i e w f a t e -

二回目の爆発が起きた時、私と優希は近くにいた。が、そこにいたやつは私たちに目もくれず、一目散に何処かへ行った。呆然としていたところに、優希が空の歪みに気づきそこへデバイスフォームで近づいた。

「なんなの．．．これ」

近づいた気がしない。しかし、確実にそこはなにか歪んでいる。
僅かの気の緩みもなくし、そこを注視する。
すると、突然何かが現れた。

「サンダースマツシャー！！」

予め詠唱していたサンダースマツシャーをソレにぶつけ、優希を引き連れてその場を離れる。
すると、そこから一匹の巨大な魔物が現れた。

「！！！」

私の背筋に悪寒が走る。あいつは危険だ、逃げると頭の中でけたたましく警鐘が鳴り響く。

「優希!!」

が、優希はそんな私を尻目にチャージを仕掛けた。

「っ」

怒鳴るよりも先に支援攻撃。私はプラズマランサーを出せるだけ出して、優希の共に向かわせた。

「クロススレイヴ!!」

三日月の波光撃を撃ち出し、さらにすり抜け様にスピークロスをかけて追撃。さらにプラズマランサーが全弾突き刺さり爆発を起こす。

「やったの!？」

「・・・いや」

私は苦虫を潰した顔をしてしまった。そいつには痛手ひとつ負わせられてなかった。

「・・・こんなものか」

「っ!？」

(喋った!?)

「ヒヒツ青いの・・・小娘!!」

魔物は一気に間合いを詰め、私に左腕を伸ばした。咄嗟に私はバルディッシュで切り払い、ザンバーフォームに切り換える。

相手の速度に合わせて切り返すが、僅かに追い付かない。

「ヒヒッ!!!」

そして触手を伸ばし、私を絡め取るうと迫ってくる。そのひとつに足を取られ、私はバランスを崩す。

「アクアジェット!!」

しかし、間一髪優希の攻撃で触手は切り払われる。そして、優希は私の近くで構え直した。

「あなた・・・何が目的？」

「目的？ヒヒッそんなもの決まっておる!!下坂魅音に用があるのじゃよ!!!」

「!?!?」

「どうやら知っておるようじゃの。隠し事はいかん、さっさと吐け」

「・・・嫌だと言っただら？」

「こっぴどしてくれる!!!」

そう言つて魔物は距離を詰めてくる。優希はクロスジャベリンモードにして迎撃しようとする。

「なっ!?!?」

が、見事にかわされさらにスピードを上げる。どうやら狙いは私のようだ。

「プラズマツザンバー!!」

カートリッジを1つ撃ち込み、雷の一閃を叩き込む。

「バカッ!!」

優希が私に怒鳴る。その意味は数瞬遅れて理解した。

そして、後ろを振り返ると魔物が今まさに攻撃しようとしていた。

- view hayate -

「な．．．」

私には何が起きたか理解できなかった。
気がつけばすでに弾き飛ばされていた後だった。

「はやてちゃん!!」

なのはちゃんは叫びながら、アクセルシューターを叩き込んでから私のところまで飛んでくる。

「大丈夫、はやてちゃん!？」

「あー．．．なんとか」

当たりどころがよく、幸い軽い脳震盪で済んだ。すぐにシュベルトクロイツを構え直し、相手の出方を伺う。

(近距離型か．．．うちらじゃかなり不利やな)

けど、そんな事は考えたらあかん。確実に潰さなきゃ民間に被害が出る。

「一気にカタつけよっか」

「了解!!」

私は詠唱を、なのはちゃんはチャージをかけながら魔力弾をばらまいていった。

- v i e w k a z u k i -

「なんだ!?!」

二度の爆発が聞こえ、俺はすぐに店を飛び出す。すると、上空ではフェイトらがそれぞれ魔物と対峙していた。

「・・・来たみたいっすね」

「まさか・・・これが惨劇!?!」

「その可能性は高いっす。京谷サンには既に連絡がいつてる筈っす。アタシらも直ぐに対応する準備をしましょう」

「わかった、俺も出る。・・・アルル」

「うん」

「ユニゾン・イン!!」

息ぴったりに、それを唱える。ただでさえ大きな魔力の奔流はさらに大きくなり、俺の髪は山吹色に変わっていく。

「一番向かうべきは高町サンたちのところスね。あそこが一番不利
っス」

それを聞き終わる前に、俺はなのは達の元へ全速力で向かった。

「間に合え．．．!!」

- v i e w h a y a t e -

「白銀の風、天より注ぐ矢羽となれ．．．フレズヴェルグ!!」

私の渾身の一撃、フレズヴェルグが全弾直撃する。

「はやてちゃん後ろ!!」

「ッ!!」

しかしまたノーダメージ。敵の右薙ぎの一撃をシュベルトクロイツ
で弾く。

「デイバイン．．．バスター!!」

なのはちゃんの援護射撃もまるで読まれたかのようにかわされる。

「ハッ．．．温いな。魅音に似てるからもしやと思ったが外れのよ
うだ．．．死にな」

魔力を込めた手刀が眼前に迫る。さすがに避けきれ．．．!!

「破魔、竜王陣!!」

「っ!!」

突然、攻撃を止め飛び退く敵。そして眼前にいたのは、左腕に千切れた陣羽織を巻く片翼の騎士。

「悪い、遅れたな・・・」

一騎くんが居た。しかし、普段と様子が違う。

『これが私と一騎のユニゾンよ』

念話で誰かに話しかけられる。誰かと思えばアルルだ。

「はやて、なのは」

敵と対峙したまま、一騎君は私達を呼んだ。さらに攻撃に備えて、刀に魔力を収束している。

「他の援護に回ってくれ」

「だけど一騎くん!」
「いいからいいから。つか・・・俺の攻撃に巻き込まない保証はない」

一騎くんの言葉には、本気で心配しているような、そんな思いが込められていた。

「・・・やれんねや?」
「多分な」

「多分ってそれじゃだめでしょ!?!」

「あーもー・・・」

なのはちゃん心配している気持ちはよく解る。私のフレズヴェルグを振り払う相手だ、いくら一騎くんでも倒せるか不安なんだと思うけど、私の目には絶対やつてくれそうな感じが伝わってくる。なんだかんだ言っても、ラウンズ05の肩書きを背負っているんは伊達やないんやな・・・。

「いくよ、なのはちゃん」

「でも・・・」

「一騎くんが大丈夫言うてんねや。ここは任せよ」

「・・・うん」

なんとかなのはちゃんを宥めてその場を離れる。

・・・死なんといてな、一騎くん。

ようやく行つたか。

はやてらの動向を見てから、もう一度魔物を見やる。異形な仮面に必要以上に長い首。筋骨隆々の体に長い尾。そこらへの魔物とは格が違うのが伝わってくる。

「ふん．．．なぜ逃がしたんだ？」

魔物はバカじゃないの、といった表情をしながら問う。まあ別に残していても良かったんだが．．．。

「なあに、はやてらを傷物にしたくないだけさ。．．．お前が試し斬りに十分な奴だといいたんだがな」

「自惚れが過ぎるぞ、小僧」

その言葉を言い終わらない内に、魔物が眼前に迫る。それを仰け反って回避し、そのまま黒龍で横薙ぎに払う。

(浅いッ)

しかし、思ったような傷は入らない。魔物が捕らえようと腕を伸ばしたのをかわしながら、微妙な距離を取る。

そしてまたチャージ。右左と順番で単純なパンチだが非常に高い破壊力を有している。

5 撃目を受けたところで、視界の右端になにかがぶれるのを感じたが、反応が遅れた。

尻尾をもろに受けた俺は、勢いよく飛ばされる。しかし魔力壁で足場を作り、受け身を取り再び構え直した。

「ほう．．．魔力壁を足場にしたら。若造の癖になかなか．．．」
「残念だが違うな」

背後に回り込み、予め刃に溜めていた魔力を解放する。

「破魔．．．竜王刃！！」

破壊力を極めた斬撃を魔物の背中に叩きつける。至近距離の攻撃だ、痛手を負わせて．．．

「残念だな、小僧」

思った程の傷は入っていなかった。

すぐに体勢を建て直し、魔物は尻尾を振り回してくる。

俺はバックステップでかわし、再び竜王刃を撃つ。しかし、今度は着弾する前に払われた。

「ふん．．．ナイトオブ라운ズの者と聞いていたが、この程度か。この仮面魔獣デスカーディウスが本気を出すまでもなかったな」

仮面魔獣デスカーディウス。ミッドではSSクラスの討伐対象で追加給金が付く程の強者だ。ランクで言えば俺より0.5上だが、たぶんそれ以上の差があるだろう。だが、俺は動じていなかった。

「はっ、この程度ならなんとかかなりそんな気がするな」

「ふん．．．大局を見誤ったか」

そう言って手を伸ばしてくる。それをラウンドシールドで受けた。

「どうした、いくらお前が格上でもこいつはなかなか割れねえよ」
しかしデスカーディウスはニヤリと．．．まあ仮面だから表情分
らないけど．．．笑った。

「だから温いのだ、小僧。」カース」

刹那、シールドが割れて俺の体に気味の悪い何かがまとわりついてくる。

「ッ！！だアッ！！」

強引に振り払い、空域から脱出する。そして飛光撃を．．．

撃てなかった。正確には”撃った瞬間に霧散した”のだ。さらに．

（毒か！？さらに視界に靄が．．．！！）

色々な異変が体に起きていた。必死に動かそうとするが動きがままならない。

「こいつはワシの体液から作った、究極の毒だ。即効性ではないし、致死させるには時間がかかるが戦闘に多大な影響が出る」

そして、俺に近づきながら説明を続ける。

「通常毒もあるがまずは視界の限定させる毒。そして行動を緩慢にさせる毒。そして極めつけは魔力の収束を阻害する毒だ」

そう言っただけに尻尾を叩きつける。

「がはっ・・・！」

「今の魔導師には魔力収束が出来ないのは致命傷だ。貴様も例外ではなかったようだな」

「ぐ・・・」

体が思うように動かない。アルルも治癒魔法を使おうとするが、カースによる影響でままならない。万事休すと言っただけだ。

「では名残惜しいが、時間だ」

そう言っただけで、デスカーディウスはカースの2射目を撃とうとしている。無論、かわす力はない。

(ちっ・・・)

その時赤い三日月が、デスカーディウスの収束した魔力塊をとらえた。爆発が起き、デスカーディウスは飛び退いて周りを見渡す。

「いやあー、まさか一騎サンがここまでやられるのは計算外でしたね」

「．．．誰だ貴様」

剣撃を放った主．．．貴輔は帽子を直しながら答える。

「なあに、しがない商店の店主っスよ」

「それは答えてないと言っただがな」

そう言いながら、貴輔に向かうデスカーディウス。

「分からない人だな」

パンチを放つ前に背後に回り込み剣撃を加える。モロに受けながらも、デスカーディウスは左腕で攻撃を仕掛けた。だが、貴輔が元いた場所に拳が届く頃には、貴輔は脇腹を斬り裂き、再び後ろを取った。

「こちらに来る間にアナタの行動パターンは解析済みです。無論アナタの必殺でもあるカーズもね」

デスカーディウスはたじろぐ。貴輔の声はあくまで冷静だ。そして普通とは微妙に形が違う刀を掲げ、こう言った。

「次は．．．攻撃する前に腕を斬りますよ」

「．．．あれ！？私なんで．．．」

「起きましたか、テストロツサ執務官」

私が目を覚ますと、目の前にはスノウがいた。スノウはため息をつきながら愚痴を吐く。

「まったく．．．つくづく甘いですわね、貴女は。私が居なければ胸に風穴が空いていたところですよ」

「．．．ていうかスノウ私に対して冷たいよね」

「あなたが甘すぎるのです」

ちよつと凹む。私たちがいたのは駅前だ。先程の戦闘で大破したとはいえ、休む場所くらいはあった。

「ねえ、さっきの魔物は？」

「．．．私が遅れを取るとでも？」

すでに倒していたようだ。たぶん私は何らかの形で気を失ったのか．．．。

「他のみんなは？」

「優希は他の場所の応援に向かいましたわ。一騎は重傷を負ったようですが、誰かが他にいます」

「そっか．．．」

良かった。みんな一応無事みたいだ。私はほつと胸を撫で下ろす。でも．．．なんだろう、この胸騒ぎは。何かまた大きな何かが近づ

いているような・・・。

「貴女でもさすがに気づきますか」

「まあ・・・ね」

今までの比にならない何か近づいてくるのが、なんとなく分かった。

それは段々と大きくなってくる。

「・・・来ますわ!!」

スノウの合図で飛び上がり、周囲に警戒をする。そして辺りを見回している。

「ッあれ!!」

私が指差した先には、もう比べるのが馬鹿馬鹿しいほどの巨大生物がいた。私らが何人でかかってもちよつと危ないかもしれない。

「あれだけでかいと、逆に笑えてきますわね・・・」

「そうだね・・・」

「後少して京谷達も来ます。持ちこたえますわよ」

「了解ッ」

そう言って、私達はデバイスを構えるのだった。

R e w r i t e s : 湯布院の惨劇 前編(後書き)

京谷「そついえばお気に入り登録があつたな」

作者「え、まじで？登録してくれた方、本当にありがとうございます。つたない文章ですが、未永く閲覧お願いいたします」

命「おおっ？作者がすごく低頭だ!？」

京谷「んで、なんか後半戦に持ち込むみたいだな」

一騎「あの下駄帽子なかなかできるぞ・・・」

命「みなさん後半戦に期待しててくださいね。それでは、ドライブ・イグニッション!!」

なのは「わ、わたしのセリフ~~~~!!」

R e w r i t e 6 : 湯布院の惨劇 後編(前書き)

きらら「そつえばね」

さらら「なに？お姉ちゃん」

きらら「なんで湯布院なの？」

さらら「それはね、作者さんが旅行の件を書こうとしたときに一番行ったことある観光地が大分だったからだよ」

きらら「だからってこんなファンタジーに現実感のあるネタを入れられても・・・」

さらら「あはは・・・では、後半戦、始まります」

Rewrite 6：湯布院の惨劇 後編

- view kazuki -

「・・・はあ・・・はあ・・・」

くそっ、さすがに挑発して乱すほど雑魚じゃなかったか・・・。
未だに視界が霞むし、体も思ったように動かせない。上体を起こすのがやっとだ。

『ごめん、一騎・・・私だけの魔力じゃ全快は難しいよ・・・。それに私も魔力収束阻害されちゃっし』

アルルは申し訳なさそうに呟く。アルルはユニゾン状態だったから影響はないと思っていたが、どうやら体内にもきっちりダメージを与えるようだ。

俺は空を見上げる。そこでは、貴輔がデスカーディウスに対して多彩な攻撃で対応し、圧倒していた。

「・・・アルル」

『何？』

「とりあえずアレのスピードに付いていけるくらいまで回復させるのに何秒かかる？」

『一騎の魔力使っていいなら30秒』

「ああ、なら任せた」

『オツケー』

そういつてアルルは治療に専念し出した。さて・・・動けるようになっただろうするか。

- view snow -

「灼火、一閃!!」

巨大生物に一撃を叩き込む。しかし、まるで効いた気がしない。

「トライデントスマツシャーツ!!」

フェイトも負けじと砲撃魔法を叩き込むも、やはり大したダメージにはならない。

「くっ・・・」

「化け物ですわね・・・」

しかし、痛みに鈍い分動きは非常に鈍重。ゆっくりと進行している割には攻撃しようという気概がない。・・・あくまで行動での話で、奴が歩く度に周りの建物などは気持ちいいくらい綺麗に壊れていくのだけだ。

「・・・どうする?」

「どうすると言われましても・・・」

残念ながら策を打つまでもなく的がでかい。とりあえず魔力が尽きるまで攻撃してもいいけれど、それでは余りに分が悪い。しかも相手の出方が分からないのだ。というか周りのみんなもそろそろ気付いてもいい気がする。

目の前の光景にフェイトは目を見開いたままだ。私もしばらく呆然としていたが、すぐに我に返って全員の安否を確認する。

「みんなは!?!」

「大丈夫、みんな巻き込まれていませんわ!」

フェイトはそれを聞いて安堵の息を吐く。しかし状況が良くなった訳ではない。

「これ程となると・・・」

「ヤバイね・・・」

私は平静を装いながら、隊長の到着を待つ。

・・・まだ来ないのですか、京谷・・・!!

- v i e w k a z u k i -

「・・・!!」

貴輔は動きを止めた。恐らくさっきの魔力収束に関係しているのだろう。驚愕の表情を浮かべていた。その隙を突き、デスカーディウスは貴輔に一撃を叩き込む。

「ガッ・・・!!」

「ハッよそ見なんざやってくれるなッ」

デスカーディウスのラッシュが始まる。今まで攻戦一方だった貴輔が嘘のように防戦一方となる。

「うおるらー!!」

気合の一発がモロに入り、貴輔がバランスを崩す。

「まだだあー!!」

さらに尻尾を叩きつけ、貴輔を撃ち落とす。

『準備完了だよ、一騎』

同時に俺の回復も終了する。突き刺さったままの黒龍を抜き、デスクーディウスの元へ飛翔する準備を始める。

『あれー!!』

アルルが叫ぶ。その先では、デスクーディウスが貴輔に向かってカーズを放とうとしていたところだ。

「ツクそー!!」

俺は全速力で射線軸に割り込もうとする。しかしギリギリで間に合わない。

「死にな」

「……ここまでっすか」

叩き落とされ、身動きができない貴輔は半ば諦めた表情で目を閉じる。しかし、俺が間に合わないと判断した保険のために用意したシールドが間に張られた。

「また貴様か。その盾では防ぎきれん!!」

デスカーディウスが力を込めると、シールドにひびが入り始める。

「いつけええええええ!!」

シールドの後ろに回り込んだ俺は、あるうことかそのシールドを叩き斬った。

「バカが!! わざわざやられ・・・て・・・」

デスカーディウスの言葉が尻すぼみになっていく。なぜなら、自らが放ったカーズが”すべて消失していた”からだ。

「一騎サン・・・」

貴輔ですら、驚愕の表情で俺を見ている。

マギナ・ブレイク。

それが今さつき俺が使った術式だ。

敵と自分の間に張られた、特殊な魔力シールドに何らかの攻撃が接触しているときに自らの手でシールドを砕くことでシールドに加えられた攻撃の”全て”を無に返す究極の防御術。さらに応用すれば、相手の防御フィールドなども無に返す事も可能だ。

しかし実践に使うには非常に使用タイミングが辛いし、わざわざ危険を犯さなくてもかわせば済む問題なため、既に廃れてしまっている。こんな術式を使うのは俺くらいだろう。

「何故．．．マギナ・ブレイクを．．．」

貴輔は本気で驚いた表情で俺を見ながら聞いた。

「魔法剣に関する書見がラウンズの書庫に眠っていたんだ。たまたま俺が研修期間に読んだものにそれがあつてな．．．ちょっと難しい術式だが京谷さんにヒントもらって覚えたんだよ」

「敵と対峙している間に、ずいぶんと悠長だなあ!？」

デスカーディウスは再びカーズをぶつける。しかし、もうあのような敵しい真似はしない。次はしっかりシールドで止め、刹那にマギナブレイクで破壊する。

「なっ．．．」

「さっきのでコツは掴んだ．．．もう当たらねえよ」

俺は刀にありったけの魔力をしつかり練り込んで込める。そして刀からは凝縮され、留めきれない分の魔力が噴き出し、ぼんやりとだかくつきりとした龍を形作り纏わせる。

「な．．．」

貴輔はその光景に絶句する。俺は、そのまま切っ先をデスカーディウスへ向けた。

「悪い．．．手加減できそうもない」

俺は剣先をデスカーディウスへ向けたまま、先程とは比べ物にならない速度で突撃する。剣先から俺の右肩にまで纏わされた”龍”は咆哮を上げながら眼前の魔物を喰らおうと口を大きくあげた。

「……………!!」

さすがにマズイと思ったのか、背を向けて逃走を図ろうとする。だが、それすらも許さない。

「逃がすかよ。龍牙、天斬ッ!!」

そして眼前に迫った俺は、テイクバックの後右腕を思いきり突き出す。纏わされた”龍”は天へ昇るかのような勢いでデスカーディウスを喰らい、打ち出された。

その”龍”は魔物を喰らった後も刀を突きだした方向にそのまま一直線に突き進んでいたが、やがて魔力の霧散が始まり消失した。

「……………」

俺はそれを無言で見つめた後、貴輔の許に降り立った。

「一騎サン……………」

「大丈夫か、浦原……………」

俺は手痛い一撃を受けた貴輔を見ながら聞いた。

「アタシなら大丈夫です。しかし、アナタはカーズをモロに受けてますよ」

「俺も大丈夫だよ。動けるようになるまでにはちょっと無茶をしたかな」

正直なところ無我夢中だった俺は自嘲気味に笑う。

未だ自分の意思で撃てない龍牙天斬。りゅうがてんざん

それはこれから俺がナイトオブラウンスに所属している間ずっとお世話になる必殺の剣だった。

「そういえば、どうして動きを止めたんだ？」

「上空で見ればわかるっス」

そう言ったので、貴輔に治癒魔法をかけてからふたりして飛翔する。ある程度飛び上がったところで辺りを見回すと、凄まじいでかさの魔物が存在していた。

「な．．．!!！」

「あいつはパトウーリアっスね。ヴォヌスの亜種っス」

「ヴォヌス．．．？」

聞きなれない単語について聞き返す。貴輔はゆっくり頷きながら話し出した。

「はい。さっきの魅音サンの話にも被りますが、ヴォヌスは魅音サンの魔力に目をつけた組織の一種の兵器っス。見た目は突然変異した亀つばいんスケど、中身は凶悪な武器を内蔵してるっス」

「凶悪な武器？」

「はい。ひとつ目はさっき放たれたデイスアスターっていうビーム。アレを本気で撃てば地球なんて一瞬で塵っスね」

「一瞬．．．」

ぞっとした。あの巨大生物はいとも簡単に星屑に出来る力があるのか。

「やっかいなのは二つ目っスね。やつは滅多に使いませんが．．．」

俺は、その後恐ろしい魔法の存在を聞くことになったのだった。

- view mikoto -

「だっしやあつ!!!」

153!

いやあ、私の撃墜記録を軽く更新してるね。

さすがに数が多いから魔力はほとんど防御と治癒に回して、自分の身体能力を存分に振るって魔物を斬る。無論吸血鬼の力を持つからこそ出来る所業であって、他のみんなはというと。

「.....っ」

「はあ.....はあ.....」

「さすがに、キツイねんな.....」

「どこから沸いてくるのよ.....」

へばってましたー。情けなっ。

というかなんでなのはちゃんとはやてちゃんまでも仲良くダウンしてるのだ。

「そりゃあ命ちゃんみたいに近距離戦えないしさ.....」

なんだかんだでアクセルシューターで蹴散らしながらなのはは答える。

「なのはさん運動ダメですもんね」

「あう．．．」

優希にまで言われ出したら、不屈のエースもお仕舞いだね。まあ二人は放っておいて。

「希来、優希。魔力と残弾は？」

「僕はまだ大丈夫だよ」

「私も、極力使うの控えてましたから」

よしよし、ラウンス勢は大丈夫みたいだ。

「私も余裕だよ」

どこかに行っていたのか、突如上から降ってきたセレナもそう答える。

「ってどこ行ってたの？」

「偵察。あまりに無限に出てくるから裏があると思って」

そう言いながら、ザコ魔物を片っ端から蹴散らしていくセレナ。魔力弾一発で墜ちてくれるからありがたい。

「それで？」

「色々飛び回った結果、どうやらさっき現れた巨大生物から現れている事が分かったわ」

「巨大生物．．．？ああ．．．」

緊張感ないのが、ラウンス若年クオリティ。優希はバトントワリングのように敵を切り裂きながら相づちを打った。

「うん。定期的に出してるよ。まあフェイトとスノウが気付いてるかは知らないけど」

「え、スノウ来てんの?」

はやてちゃんが驚きながら聞いた。今さらだけど私達暢気に話ながら戦ってるよね。

「うん、袴のバリアジャケット着るようなやつなんてスノウ以外知らないし」

「あ、納得」

「で・・・どうするの?」

至極真つ当なのはちゃんの疑問。セレナはそうねえ、と言いながら首を捻る。

「私の三龍帝使ってもいいけど、それでもいけるかと言われたら・・・」

「というかこの世界のマスコミに嗅ぎ付けられるわけにはいかないしね」

「いや手遅れやって」

はやてちゃんはなにいうてんの、といった顔をする。と、その時。

『おい、聞こえるかみんな!?』

「京谷!?!」

「隊長!?!」

我らが救世主、京谷君から通信が入った。

『良かった・・・生きていたのか』

「もちろんですよ」

「京谷くんこんなんでうちらがへばると思うっ?」

「さっきまでへばってたでしょ」

「あ・・・命ちゃんにセレナちゃん、それは言わんといてえな」

はやてちゃんは困った表情をしながら両手を合わせてせがむ。

私たちはそんな優しくくないですよーだ。

「それで隊長は今どちらに?」

『ああ・・・でかいやつ目の前だ』

えー。

I v i e w k y o y a i

へ・・・これだけでかいと笑えてくるな。

「今私があいつに思ったこと思いましたわね」

「べ、別にいいだろ!?!一応初対面なんだから」

「笑いとしては失格です」

「おまつ、笑いはとらねえよ!?!」

「あなたが反則的な強さですからハンデとしてボケるべきですわ」

「お前どっちの味方だ!?!つかフェイト俺見てドンマイみたいな顔するな!?!悲しくなるから!?!」

「来ますわよ」

「うわああ!?!」

んな言い合いしてる内に、的の魔力弾が異常な量で迫ってくる。

「チツ」

俺は防御フィールド”絶対防御圏^{イージス}”を展開する。こいつなら殆どの攻撃は……

カシャン……

「な!?!」

”絶対防御圏”が割れた。さすがに油断していたので、急遽かわす。

「なら……破道の六十三、雷吼砲!?!」

放射状に広がる砲撃、雷吼砲で魔力弾を片っ端から……。

「なんで撃ち落とせないんだ!?!」

「知りませんわよ!?!」

三人してふわりふわりと回避し続ける。これでは全く埒が明かない。そしてそこへ通信が入る。

『京谷ツ!?!』

「一騎か!?!浦原さんも!?!」

『いいか……よく聞いてくれ。そいつの魔力弾は……』

俺や同じく通信を聞いている二人も生唾を飲む。そして一騎は口を開く。

『全ての魔力を打ち消す、あるいは相殺する……!?!』

「「「!?!?」「」」

魔力を打ち消す。つまり、魔力によって生成されたものは全てあの魔力弾には無効と言うことだ。

「つて勝てねえじゃねえかロリコン一騎!！」

『俺にキレんなハーレム隊長!！』

「ああ!?!まだハーレム作ってねえよ!！」

『まだなのかよ!?!作る気満々じゃねえか!?!』

「いいじゃないか、男の夢だろ!！」

『だから後で苦労するんだよテムエは!！」』

「つかさつきからタメ口だな!?!」

『良いだろうが、同じ年なんだからよ!?!』

「知るか!?!敬え!！」

『なんだとゴラ!?!』

「『. . .!?!』」メンチの切り合い

『口喧嘩はその辺にして. . .直接叩けば問題ないっス』

それを早く言えよ。なぜかすごく疲れた気分だ。

『いや、笑いは必要だと思っんでww』

「てめえ. . .」

『それより、あれだけでかいつスから硬さも相当っス。あれを叩き斬れるほどの破壊力を秘めた武器が. . .』

「ある」

俺は断言した。俺が知り得る中では世界最強である、一本の剣を。

『. . .エアか』

「ああ」

これは一ヶ月前に俺が本物にした、乖離剣エア。こいつなら斬れるはずだ。

俺は直ぐ様トレースし、右手に握った。

『へえ．．．世界最強であるだけ、禍々しい魔力放ってるっスね』

貴輔は誰に言うでもなく呟く。

「で．．．一刀両断か？」

『まあ．．．ですかね』

「了解。スノウ、フェイト!!！」

俺は同じく魔力弾の嵐から逃げ回るスノウとフェイトを呼び出す。

『な、なんですの!?! (ハアハア)』

『きょーやあー、私もう．．． (ハアハア)』

やばい、かなり無理させていたみたいだ。可哀想なので、手短に用件を伝えることにした。

「いいか、おれがいつせーのー、ついたら一騎らのとこに逃げる」

『はあ!?!』

『え、ちよ、きょう．．．!!!』』

「せえー．．．のう!!！」

『『京谷のバカあ!!!』』』

三人の罵倒が見事に重なり、同時に俺はデカブツの元へ向かい、スノウらは一騎らの元へ飛んでいった。

．．．というかなんでバカとか言われなきゃならないんだよ。

まあそんなこんなで、デカブツの目の前に来た。デカブツは俺を緩慢な動きでだが、しっかりと俺を見据えてくる。

「へっ．．．もうここまでくりやあ下等神並だな」

存在するだけで押し潰されそうな程のオーラが俺を襲う。並の魔導師なら当てられただけで気絶モノだろう。

俺はエアに魔力を込めて、敵の出方を伺う。

『ッ！！京谷、下がちなさい！！』

スノウが警告を発してくる。恐らく、この魔力の奔流と関係があるのだろう。

だが、こんなもので動じるはずがない。

魔力の装填を終えた俺は大きく飛び上がり、デカブツの上空に迫る。

「^{エヌマ}天地乖離す．．．^{エリシユ}開闢の星ッ！！」

そして、頭のとっぺんから思いきり両断しようとするまま斬り下がる。世界最強であるこの剣の一閃は瞬く間に敵の体を裂いていく。そして。

ズウウウウン．．．

一刀が地面まで降り下ろされたとき、敵は真つ二つになり左右に倒れる。そして俺はすぐにその場から離れ、エアを担いだ。

『や．．．やりやがった．．．』

『うわあ．．．』

『啞然とするしかありませんわね．．．』

俺の荒業にあんぐり口を開けたままの一騎たち。しかしやった俺も驚きの破壊力だな。

『たいちよー、雑魚片し終わったよー』

『お、命たちもお疲れ』

『うう．．．京谷くん疲れたあ．．．』

『後で休めばいいだろ』

『あはは．．．』

命たちも周りの雑魚敵を片し終えたようである。しかし、倒して油断していた俺に凶刃が向けられる。

『京谷サン下！！』

『な！？』

突如伸びてきた触手を切り払いながら、俺は距離を取る。下をみやると、先程倒した魔物がただの黒い塊に変わっていた。そしてそれはみるみる内に変形し、人形で人と同じくらいの大きさ、両腕は鎌鼬のごとく刃となっていた。

『形態を変えたのかよ．．．いいぜ、来な』

『待ちなさい』

『！？』

突然頭に響く声に全員が驚く。全員に聞こえたと言うことは全員に

向けられたのだろう。
そしてその声はやがて、直接聞こえてきた。

「お疲れさま、奏っちゃんの騎士たち。こいつは私に任せな」

俺の肩に手を置きながら言ったのは昨日俺を押し込んだ女だった。

「あ、あんたは・・・」

「昨日ぶり・・・時間にして20時間50分27秒ぶりだね、少年
無駄に詳しいな」

「あっはっはっ」

女はにつこりと笑いながら言った。前会ったときと違い、フードを脱いでいた。

整った顔立ちで栗色の髪、そしてフェイトと同じツインテール。勝ち気なツリ目に、檸檬色の瞳。

そんな美少女を思わせる女は向かってくる敵を軽く一蹴して大きく吹っ飛ばす。

「さて、約束だから私の名前を教えなげ。私は、下坂魅音。よろしく、京谷くん」

「魅音・・・じゃああんたが・・・」

「そ。私がかつて魔力EXを初めて取ったエースなのだよ」

「だけど若いな。なんでだ？」

「それは秘密。さ、分かったならさっさと安全圏へ行く!!」

「な!? 何いってんだよ!! そいつは・・・」

魅音はやれやれと首を振りながら、嘆息する。

「分かってないなあ。残念ながら”今はまだ”私の方がボウヤより

強いから」

ぼ、ボウヤ……。そこまで言われなきゃならないのかよ。

「・・・分かった」

そう言っつて、俺は安全圏まで下がった。

- view mion -

あちゃー、ちよつとプライド傷つけちゃったかな。私もあそこまで言わなくても良かったね、うん反省反省。

さて、京谷くんを離れさせたはいいけどこいつがどんな動きをするかで私の戦闘スタイルは変わる。とりあえず先制しとくか。

「行くよ・・・ガンスレイヴ!!」

私の呼び掛けに応じて、周辺に私の魔力で造り出した自律兵装が12基現れる。細かい魔力弾の他に単独で突っ込ませられるスパイク付だから困ったときに便利だ。

「さあ、行きなッ!!」

そして手掌で操り、敵へ向かわせ集中砲火を浴びせる。そして私はさらに魔法詠唱に入った。

「穿て稲妻・・・」ライジングショット”!!」

私が一番最初に編み出した直射魔法を土手っ腹に撃ち込む。そしてさらに接近して。

「パルマ・・・ファイオキーナツ!!」

これまた私が編み出したゼロ距離魔法。これは集束砲撃に使用する魔力を極限かつ短射程にのみ効力を発揮するように圧縮した正直ミッド式には無駄な魔法だ。ただし、非殺傷を解けば効力範囲の関係で確実に撃墜出来るため、狭い空間での戦闘では私的に重宝する。しかし。

「やっぱ簡単にはいかないかぁ・・・」

結構な痛手を与えたが、さすが”私の魔力から産み出された”魔物だ。無駄に強い。

「・・・けど、勝てるなんて思うなよ」

私は右手にスプリガンを握った。同時に鎌鼬を振るい、私に攻撃してきたので”フリット”で間合いを取る。

そしてスプリガンをザンバーモードに切り替え、近接戦闘に対応できるようにする。

「!..!」

そして敵はニタニタ笑いながら迫ってくる。次いで振り下ろされた左腕を紙一重でかわし、骨盤の上を両断してまた離れる。

無論超速再生で無に返されたが、確実にダメージは蓄積している。

「さ・・・来なよ。まだ本気出してないから」

そう言つて、私はザンバーズプリガンに魔力を溜める。

私の戦闘スタイルは基本的に何でも御座れだが、一番得意なのはガンスレイヴで攪乱してからザンバーで片っ端から斬り伏せる戦法だ。私程になれば、一瞬で行路をトレースできるから意外と効率はいい。刹那、魔物が消え私の背後に周り首に鎌を宛がう。くっ、無駄に速いじゃないの。

しかし、さらに私はそのコンマ三桁の間に背後に回り込み首を切り落とす。．．．無論回復されるのだが。

「こつちだよ!!!」

私は上空へ飛ぶ。もちろん、追いかけてくる。そこで私は急にバツクステップをかけて、背後を取った。が、反応がいい。直ぐ様敵は振り返つて右腕を後ろに払ってきた。

それを私はザンバーで受ける。計算通り!!!

私はザンバーを形成する魔力波を自身の技能の闇変換でスカーレットに染め、そのまま振り下ろす。

「クレツセント．．．クラツシャアア!!!」

クレツセントクラツシャアは私の”近接攻撃”最強の技だ。

そこから放たれる、ザンバーと同じ色をした三日月状の斬撃は敵の右半身をバツサリ切り裂いた。

あ、もちろん超速再生で元通りになる。その超速再生による戻りが若干遅くなつたのを私は見逃さなかつた。

「バインドッ!!!」

あらかじめ詠唱しておいたバインドで魔物の体を絡め取る。尋常でない固さのこれを疲弊した状態ではまず破壊できない。バインドを壊そうともがく敵に私はゆっくりと近づき、下側へ回って通常形態に戻したスプリガンをあてがった。

「よく頑張ったよ。けど．．．」ハテス・クイーン「冥界の女王」の敵じゃなかったね」

スプリガンの先端に魔力を込める。

魔物はこいつはヤバイと本能的に悟ったのか激しくもがき出す。

もちろん、逃がす気はない。

やがて、魔力は集束を終えた。私は軽く魔物の体にスプリガンをめり込ませ、解号を唱えた。

「ライオットバスター、シユート」

刹那、先程この魔物が湯布院を割ったビームを越える破壊力を持った集束砲が魔物を塵に返すのだった。

- v i e w k y o y a -

「え．．．えげつねえ．．．」

俺は先程の時間にして一分前後の戦闘を目の当たりにして、啞然としていた。

正確かつ隙を与えないコンボに多彩な攻撃。

さらに僅かな攻め時のサインを見逃さず、確実に撃墜する決定打の保持。

「化け物じゃないか．．．!」

そんな俺の戦慄を余所に、魅音はすつきりとした顔で俺に近づいてきた。

「ふふん、どうよ」

「・・・凄いな」

「でしょ?」

魅音は勝ち誇った顔で笑う。確かにそうするだけの實力はあった。しかし、少し解せないことがある。

「どうして・・・40年前のエースがこんなに若々しく・・・」

『魅音サン・・・?』

しかし、貴輔の乱入に俺の言葉は遮られる。

魅音は貴輔を懐かしむかのような顔をしていた。

「久しぶり、貴輔」

『・・・脱出出来たんスね。どうですか?久々の人間界は』

「んー、悪くないよ」

『そうですか・・・』

貴輔はそれきり、物憂げな表情をする。

「ガーネットやロツクは元気?」

『大丈夫っスよ。元気にしてます』

「そっか・・・良かった。・・・っと、そろそろ行かなきゃ」

魅音はそう言うと、自身に転送魔法をかけた。魅音の体が光に包まれ、呑み込まれていく。

「待て！！アンタはなにを言いたいんだ！？」

「私からは時間の都合上言えないわ。詳しくは・・・奏っちゃんと貴輔に聞いて」

魅音の声が遠くなり、やがて消失した。

『浦原・・・』

「浦原・・・、後で聞かせてくれないか？局長と一緒に」

『・・・もちろんっスよ。奏サンもこの世界に呼びます』

時間にして二時間弱。湯布院を襲った惨劇は大きな爪痕を残して幕を引いたのだった。

R e w r i t e 6 : 湯布院の惨劇 後編(後書き)

さらら「おおゝ……。謎が謎を呼びますね」

作者「んだねえ。でも……。これを読んでも読んでる人は興味持って読んでくれるのかなとすごく不安ね」

さらら「じゃあ読者さんに聞いてみます？」

作者「いやいや、それはさすがに……。でもレビューはすごく励みになります。なんか適当なところは……。見逃してください」

さらら「それでは、読んでくれた人にはいっぱい感謝！次回も見てくださいね。明日の未来も、撃ち抜いて見せるッ！！」

作者「……。何のネタ？」

R e w r i t e 7 : 奏の記憶 前編(前書き)

作者「さて、今回も前編後編構成になります」

一騎「いちいちタイトル考えるのかったるいからとか言ったら殴るぞ」

作者「いやいや、わざわざ凝ったタイトルにすることはないでしょう？わかりやすさが大事なの。では第七話、お楽しみください」

Rewrite7：奏の記憶 前編

- view kazuki -

さて、ここは悠水亭。

あんだけの騒ぎがあつたにも関わらず、俺達を泊めてくれる宿主の肝っ玉振りには感服である。

「．．．来ましたわ」

スノウが転送魔法を感知する。すると空間が縦に裂け、中から俺たちの部隊の真の指揮者、堂本奏が現れた。

「ふう．．．何度やつても疲れる．．．。皆、お久しぶり」

奏は優雅に一礼して、用意された座布団に座る。そして辺りを見回し、貴輔の所在を確認するとようやく口を開いた。

「貴輔．．．五年ぶりね。元気にしてた？」

「もちろんっスよ、奏サン。アナタこそいつもお疲れさまっス」
「ありがとう、貴輔」

奏は優しく微笑む。どうやら彼らは並々ならぬ関係のようだ。

「局長、そろそろ．．．」

京谷が急かして、奏は我に返る。そして話始めた。
皆は真剣に耳を傾けようとする。

「まずは、私達の事を言わないとね。私と貴輔．．．ここにはいないけれど、ガーネットとロック、そして魅音は管理局では無敵の五人とされた」

「ガーネット．．．ガーネット・テイル？」

セレナが食いつく。

「うん．．．。管理局では歴代最強の召喚士で、魅音の後を追ってEXランクを勝ち得た天才．．．」

「やっぱりかあ．．．私の目標なんだよね」

セレナはふふふ、と笑いながら言う。

「ガーネットは記録では龍神バハムート零式、機械神アークを操る”女帝”と呼ばれた天才だ。」

そしてロック・パスカルは世界を股にかける伝説の盗賊で、近接戦闘において無類の強さを発揮したそうだ。

いつの間にか管理局に協力するようになったとされている。

そして奏や貴輔も凄腕の魔導師だった人達だ。この五人は40年前の管理局の切り札だったのだからと言うことを改めて知った。

「私達、実は魅音と同じ年の52歳．．．」

「「嘘!?!」」

「嘘じゃないっスよ」

貴輔は奏除く全員の言葉を否定する。

「私たちにも、呪いが掛けられていたから．．．」

「呪い．．．?」

「うん．．．。皆には、この事を話さなきゃいけないね．．．」

奏はそう言つと、慈しむかのように過去の話を始めた。

- EPISODE: mion's history (view k
anade) -

新暦0029年11月末。

私達は12歳。

この時から既に私、魅音、貴輔、ガーネット、ロックは周りを超越する戦闘能力を有していた。高速機動による遊撃の私、近距離戦闘のプロフェッショナルのロック、あらゆる研究から導きだした有効的な戦い方をする貴輔、遠中近どのレンジでも無敵を誇る魅音、二騎の究極召喚を行使するガーネット。

この時既に私達は仲良く魔力ランクSSSを獲得しており、管理局最強の名前を欲しいままにした。

「こら貴輔ッ！！また部屋散らかして・・・またワケわからないもの作ってるの!?!」

「べ、別にいいじゃないっすか・・・」

「まあまあ、魅音も許してやりなよ。浦原は研究好きなんだから・・・」

「そっだよ、魅音。一応役に立つんだしさ」

「そ、それはそうだけど・・・」

魅音はやれやれといった感じで首を振った。それを横目で見ていた私はくすくす笑う。

「・・・なによ」

「うっん、なんでもない」

「なんでもないのに笑わないでしょお．．．？」
「こ、怖いよ魅音．．．」

私達は皆似たような境遇．．．つまり、両親がいないということこの年齢にはなかなか過酷な状況に置かれていた。

それ故にひかれあつた私達は、いつの間にか五人で一部屋を共同で使い、いつも一緒に訓練や仕事に励んでいた。

「ねえねえ、夕方に訓練し終わったら三連休だよね？」

ウキウキしながら魅音は言う。

「そうだね。私達にしては久々の連休なものね」

ガーネットはようやくか、と言った表情を浮かべる。12歳ではあるのだが、実力ゆえにたくさん仕事舞い込んでくるため中々休みがない。もちろんこんなことでへばる私達ではないが、やっぱり休みは欲しいところである。

「アタシはまた研究したいっすよ．．．」

「つか暇さえあればいつも研究してるよな、貴輔」
「アタシの趣味ですから」

貴輔はニコニコしながら答えた。私はと言えばいつも一歩後ろから微笑ましく眺めていたものだ。

「こらこら奏、あんたもいつも後ろから付いてくるだけじゃダメなのよっ」

「うっ．．．解ってるけど．．．」

「解ってるなら割り込む!!」

「ひゃあ!？」

魅音に引っ張られ、私は皆の輪の中に放り込まれる。

「はは、奏いつもこうして引っ張られてるな」

ロックは可笑しそうに笑いながら言う。

凶星なので私は全く言い返せない。

「うっ．．．」

「”非情の天使”も、”冥界の女王”ハデス・クイーンには形なしよね」

「あんたも勝手に私の二つ名つけないの」

「いいじゃないっすかー、魅音サンは闇魔法使うんすからお似合いっすよ?」

「まあ確かに私は闇使えるけどさあ．．．」

魅音は気恥ずかしそうに頬をポリポリ掻きながら言った。

まあ女王というよりは鬼だよね、魅音の場合は。

「まあいいや。明日からどうするの?」

「折角だから体動かしにいかないか?バッティングセンターとボーリング」

「ロックは体動かす事しか能がないのね．．．」
「うっせ」

なんやかんや話している間に、私達の部屋に着いた。

「あー疲れた。先シャワー浴びるわー」

入るや否や豪快に制服を脱ぎ捨てながら魅音はシャワー室に入っていく。

「・・・」

「魅音サンには恥じらいがないんスカね・・・」

「別にまだ気にするような年でもないだろ、まだ貧乳だし」

「だっ誰が貧乳よ!？」

「いや・・・この年齢なら妥当・・・」

シャワー室から魅音の怒鳴り声が聞こえる。思えば魅音は地獄耳だったっけ。

「飯食うとやることないよな・・・」

誰に言うでもなくロックは呟く。確かに管理局の設備じゃ子供達は娯楽に困る。なので私達の遊びは必然的に体を動かす遊びになってくるのだ。

「・・・ツイスターゲーム？」

「いつの時代の人間なんスカガネットサン」

「じゃあアレか？みおから始まるリズムに合わせてーってやつ」

「だからいつの時代の人間なんスカロックサン」

「じゃー、ふーえーるーアハツハッてやつ」

「私らは トビメンバーじゃない・・・」

なんでこうもはね ビから離れないのだろうか。と言うか時間軸的には私たちが開発した的な感じのノリだ。

「じゃあアタシの取って置きを使うしかないじゃないっスカ」

と言って貴輔が取り出したのは。

「はっ、奏また借金かよ！」

「うう．．．なんで仕返しするの．．．」

「ガーネットは手堅いっすから．．．」

人生ゲームだった。無論、貴輔が造り出したバーチャル筐体式である。

雀荘の雀卓より一回りほど大きい程度のため、五人部屋である私達の部屋では特に場所は取らない。

ちなみに中のハードウェア（カートリッジ式）を入れ換えれば麻雀や桃電なども出来る超万能な機械だ。その時は各々用の操作盤を取り付けなければならぬが。

「あ、私上がり」

しばらくして、魅音が一番乗りを宣言する。見れば、調度決算から一発でゴールしていた。

「．．．何やっても無敵だね」

私はなんだか切ない気分となる。

「い、いやこれは勝負の世界だし．．．」

「そ、そうだって！！たまたまだよたまたまつ」

「いいもんいいもん．．．私は貧弱でぺったんこで役立たずだもん．

」

「あーあ、魅音サンのせいっスね」

「私!？」

ま、なんだかんだで遊び倒して皆は爆睡し始めた。みんなのように騒がない私は、まだ眠くならない。

「．．．23：11か」

私は机に掛けていた陣羽織．．．別に戦いに着けないが．．．を羽織って部屋を出た。

目指す場所は訓練用湾岸都市があるエリアだ。あそこは意外と静かな場所なので、私のお気に入りの場所でもある。

「そろそろオリオンが見えてくる季節かあ．．．冬の星は綺麗」

誰に言うでもなく、私は呟く。自然を慈しむのは、私が管理局に入ってから覚えたことだ。というか、血生臭い戦場を翔ける私にとっては非常に大切なことである。

私が、護るべきモノを忘れてしまわないように。そして、また立ち上げられるように。

「おーおー、また一人で抜け出して!!」
「ひゃやああ!?!」

突然背中に現れた魅音の声には私は情けない声をあげてしまった。

「な、なんで後ろにいるのよ!?!なに、ストーカー!?!私拐われる!?!」

「落ち着け落ち着け」

「いーやー拐われるー!?!」

「ああもう可愛いなかなでん!?!」

閑話休題。

「で?どうしてついてきたの...?」

「なんでってそりゃ眠くないからどうしようかと悩んでたらかなでんがどこか行こうとしてたから、面白そうと思って...」

えー。

「ま、いいじゃない。あ...なんか飲む?買ってくるよ」

「じゃあ...ミルクケーキ」

「オッケー。じゃあ買ってくるよ」

そう言っつて、魅音はここから五分歩いたところにある自販機へ向かった。...もちろん瞬動連発によって1分とかからなかったが。そして、程なく魅音は飲み物を買ってきた。

「はい、かなでんの好きなキャラメル味」
「ありがとう」

魅音からミルクセーキを受けとり、プルタブをあける。
魅音はなにを買ったのだろう・・・ちらりと見てみる。

リリカルスウエット

えーつと・・・。

「ん？なに？」

「な、なんでもないよっ」

一度ベンチに缶を置き、目を擦る。そしてもう一度魅音の飲む缶の
銘柄を見る。

リリカルスウエット

ネタだ・・・絶対ネタだ・・・！！

「どしたん？その」リリカルスウエットってなに！？作者のネタ？

”みたいな顔は”

「え．．．えつと、魅音の突っ込みはよく分からないけど、そう言う世界の理に触れることはよした方がいいと思う．．．」

魅音の台詞はいつも危険だ。

「ま、いいじゃん。味はポ　リだよ」

「そんなことだと思っただよ」

所詮作者の知識や捻りはその程度だ。

とりあえず置いていたミルクセーキを口に含む。甘ったるい味は本当は苦手だけれど、私はなぜかこのミルクセーキだけは好きだった。

「ふう．．．そう言えばもう2年なんだね．．．」

魅音はふう、と息をつきながら呟く。少し肌寒い風が魅音の二つに結われた栗毛をそつと撫で、そよそよとなびく。その後ろ姿は、普段無敵の彼女が、本当は儂く壊れてしまいかねない存在なのかもしれないことを指しているようだった。

「そうだね。短期プログラムからの付き合いだっけ」

「そうそう、最初の任務のときにロックを保護していつの間にか管理局にいたしね」

「なんか凄く昔のように思えるな．．．」

私は空を見上げながら苦笑いする。魅音の破天荒に皆がついてゆき、そして苦楽を共にしてきた日々。それらは私の一番大切な思い出だった。

「そろそろ戻ろっか？」

「うん」

各々飲み干した私たちは立ち上がり、ゴミ箱に缶を捨ててから部屋に戻る。

明日も楽しい日に出来たらいいな。

そんな、淡い期待を抱いていた。

「なんか偉く普通な話だな」

京谷は奏の話の聞いて率直な感想を言う。

「それは、どんなことにも起承転結は要るから。私が話したのはまだ起」

奏はしれっと受け流す。真剣に話を聞いていたなのはたちは、

「そうなんだ・・・」

「続き気になるね・・・」

「色恋とかあるのかな？」

等と、非常に関心を抱いて聞いていた。

「京谷もこれくらい素直ならいいのに・・・」

スノウが京谷の態度を見て、やれやれと言った表情で嘆息していた。うん、それは同感する。

「で、続きがあるんだろ」

「うん、だから続けるね．．．」

奏は一呼吸置いて、また話し始めた。

そして次の日。ロックの要求通り、バッティングセンターに来ていた。

「魅音、今度こそ負けねえからな」

「アンタこそへマやらかさなないようにね」

二人がなにを張り合っているのかと言うと、ホームラン競争である。私たち御用達のバッティングセンターは通常用と実践用、そしてひたすらかつ飛ばすホームラン競争用とある。

ご丁寧のパノラマなので、より臨場感ある打撃が出来る。さらにはこここの常連内では二人の対決はちよつとした見物になっていた。

「嬢ちゃん頑張れよ!!」

「そっちの君も打ちまくれよ!!」

皆の声援を受けながら二人はバッターボックスに入り、構える。どちらも無駄の無いフォームだ。

カキイイイン
キインツ

打撃もどちらも譲らない。そんな熾烈な争いを余所に私たち野球はべつにい組はのんびりスマツシユピンポンをしていた。

「そついやさつ」

私はバックスマツシユを決めながらパートナーであるガーネットに問いかける。

「なにっ？」

ガーネットもまた、動きに無駄のないスマツシユを決めていく。

「なんかっ、変な魔物が観測世界に出回ってるらしいっ」

「あー、聞いた聞いたっ。行方不明者も出たらしいねっ」

今、管理局では不可思議な事件が起きていた。

観測世界に出現する謎の魔物。特に危害を加えてくるわけではないが、一部に被害が出だしたために管理局では少し警戒されている。あっけらかんと話しているのはプレイしながらなので仕方ない。

「もしかしたら私達にも出向命令出るかもね」

最後の球を見事にスマッシュし、最後のゾーンに落とす。まさかの全面ストライクに私は驚いた。

「そうだね．．．本当ならないのが一番だけど」

「あはは．．．」

「お、終わったっすか？」

私たちが打っている間、座って待っていた貴輔が出迎えてくれる。その貴輔の手にはノートPCが抱えられていた。

「今度は何してるの？」

「いや、アタシの新しい魔法の術式考えていただけっすよ」

そう言っつて貴輔はパソコンを開け、プログラムファイルを開きました。

「まったくわからん」

ガーネットは一発でサジを投げた。うん、私にもさっぱりだ。

「そっすねえ．．．奏サンの為の技ですよ」

「私の？」

「はい、まあ．．．昔の文献から引つ張ってきたのを奏サン用に改編するだけです．．．。奏サンは天使の血が流れているでしょう？」

「まあ流れはしているけれど」

そうなんです、私は某天使ちゃんよろしく天使の血が流れています。なんせ天界の人間ですから。そしてなぜ私の術式なんだろう？

「これは天界の上級階級にいる戦士が扱える身体強化術っす。これを使いこなせば奏サンはアタシたちより強くなれますね」

あっさりと貴輔は断言した。

「実感沸かないけどね．．．」

「あはは．．．」

ガーネットは愛想笑いを浮かべる。私もそれにつられてつい笑ってしまった。

その刹那、私は一瞬だが異常なさつきを感じた。

「ッ!？」

「ん?どうしたんスか?」

不思議そうに貴輔が聞いてくる。ガーネットも「?」マークを頭に浮かべていた。

「いえ．．．よく分からないけど、一瞬殺気を．．．」

「殺気?ああ、アレッスか?」

貴輔がのほほんと指差した先には。

『だらつしゃあ!!!』

『うおお!!150メートル!?!』

『どっせええええい!!!!』

『お嬢ちゃんは151メートルか!!!』

『ガキの癖にやるじゃないか!!!』

『はっ．．．負けねえぞ魅音』

『あたしもだよ．．．!!!』

たしかに殺気立ってはいるけど。
二人の殺気なら普通にスルーできるレベルだ。人一倍感覚に敏感な私を感じ違えるはずはない。

「奏考えすぎだよ。疲れてるんじゃない？」

「でも……」

「まあまあ。何のための私達かな？」

ガーネットが胸をトン、と叩きながら言う。

確かに私達SSSランクが五人いるのだ。そういう意味ではなんとでもなりそうな気がする。

「だよね。私も考えすぎかな……」

私は情けなく笑った。そして再び羽を伸ばしにガーネットらとピンポンやらなんやらを疲れない程度にやっていく。

私は……この判断を一生悔やむことになるなんて思いもしてなかった。

市街を歩き回り、遊んだところで夕食とした。

場所は地下市街にあるうどん店。手打ちでコシがあるから美味しい、
というのは貴輔の弁。

「いやあー、遊び倒したねえっ」

魅音があっぱれあっぱれといった感じで言う。

「アタシはしばらく勘弁してほしいですねえ．．．」

「私も．．．」

「なーにいつてんよ貴輔に奏。一番出不精なのは貴方たちなんだからたまには外出するの！」

ここぞとばかりに魅音はお姉さんぶつた口調で演説する。

対する貴輔はなんとも形容しがたい嫌そうな顔をしている。

「えー．．．」

「えーじゃないつ。大体男がえーゆうても可愛くないわよ」

「解つてますよおそんな事」

「離してロック！！一回シバきあげないと気が済まないの！！」

これははいはい、お姉ちゃん解つたからもついいよ的な感じのアレだ。貴輔も魅音の扱いに慣れてきている。

「も、もお！帰るわよ！！」

顔を真っ赤にして店の外に向かう魅音の後を連れだつて私たちは付いていく。そして地上へと続く階段を一番最初に登りきつた魅音は不意に立ち止まる。

「どつしたの？」

そのすぐ後ろにいたガーネットが肩口からひょっこり顔を出す。そして同じく固まる。

「．．．．？」

私、ロック、貴輔は首をかしげる。そしてその後ろから様子を伺う。

「「「」．．．」」」

暫し硬直。

「あつはっはっ、まさかまさか？」

「そうそう、あんだけはしゃいでいる間に地上が何故か壊滅してて魔物がたくさんいて、それを知らずにノコノコ出てきた私達の前に待ち構えて今まさに殺そうなんて．．．」

『キシヤアアアア！！』

グシャツ

殺られるわけじゃないですか！。私達SSS戦隊ですよ？
ロックの魔力弾で魔物は爆散し、数瞬遅れて私達はバリアジャケツ
トモードになる。

「．．．たく、洒落にならないわね。全員でとりあえず適当に潰して回るわよ」

「「「」了解」」」

魅音の合図で全員が適度に広がってこの都市で一番大きい広場まで走り出す。

その間、魔力の波動を嗅ぎ付けて全方向から魔物が襲いかかってくる。

「邪魔だよ、アンタ達！！」
「でやああ！！」

魅音とガーネットが僅か1秒以内に計数百の魔力弾を形成し、撃ち出す。無論敵は全滅。
更にあれだけの魔力弾を形成しながら建物にそれ以上の僅かな破損を与えない正確すぎる誘導技術。
本当に頼もしい限りだ。

「さて・・・アタシも見てばかりじゃつまらないっスね」
「だな」

貴輔とロックは何かを申し合わせると同時に瞬動をかけ、前方にいる敵の群れに突っ込む。

「カリーシュダイヴツ！！」
くれないのつめ
「紅ノ爪」

蟻に対する巨像の一撃の如く、桁違いの破壊力を込めた一撃を叩き込んでいく。

「ひゅーっやるねえ」
「まだまだっスよ」

そんな無駄口を叩きながらみるみる内に敵を潰してゆく。そしてあらかた倒したところで、私達は広場に着いた。

「ふうっ！大したことなかったね」
「そろそろ管理局に連絡入れた方がいいんじゃないかな？」

ガーネットの言葉に応じ、私は端末を呼び出し本局に繋ごうとする。

「あれ．．．？」

「どうしたっスか？」

私の間抜けな声に貴輔が聞き返す。

「本局に通信が繋がらない．．．」

「うそお？見せて」

半ば信じていない魅音が貴輔を押し退け私の端末を覗く。しばしそれを見つめてから、

「確かに繋がってないねえ．．．」

と、呟く。今の時代ならAIがそういうのを管理してくれるが、この時代は本当に魔力を行使するための媒体．．．例えるなら某子供魔法先生の指輪みたいな機能しか果たさないのだ。

昔の魔導師が反則気味に強いには、自分自身がデバイス並の演算能力を備えている所以だ。

ちなみに、今のAI管制システムを確立したのはこれから10年先の貴輔である。

「どうしてやる．．．」

などとあれこれ議論する。

私はちよつと焦るけれど、多分管制システムの異常か何かだろう。そんなのんきなことを考えていた私に、昼間のあのさつきを再び感じる。

「ッ!！」

「か、奏!？」

「かなでっちゃん!？」

異様な冷たい殺気にあてられ、私は昏倒しそうになる。

この前よりも殺気が近い。

しかも．．．近づいてきている．．．!!

これはヤバイ。危険だ。逃げさせなきゃ。

頭の中で警鐘がやかましく鳴り響く。しかし、声に出せない。

周りのみんなは気づいていない。いや、”私にしかわからないようにしている”のかもしれない。

「まさか、五人とも居たなんてね。まあ、いいや。皆、消えてもらうから」

はっきりと声が聞こえ、全員がそちらを向く。

そこには、私達と同じくらいの大さの詰め襟を着た子供と、その従者であろう桁違いの魔力を持つ魔物が三体居た。

よく見ると、少年の頬にはそれっぽい紋様が入っていた。こいつも魔物なんだろう。

「」

「一人は殺気だけで立ち上がれないか．．．じゃあ、邪魔な方から」

そう言っつて、少年は右手の人差し指を私に向ける。

その刹那、魅音が割って入りシールドを展開した。

そのまた刹那、大きな爆発が巻き起こる。

「残念だったね。見えてたよ」

魅音は口の橋を釣り上げて笑った。

状況についていけなかった他の三人もようやく我に帰り、デバイスを構える。

「通信妨害してるのは君だね？」

「そんなことが気になるのかい？それより自分達の心配をするとい
い」

そして再び魔力弾。今度はロックが魔力弾で弾き、別の場所に落とす。

「なんだ、大したことじゃないな」

「落ちた場所を見るといい」

そう言つて少年が指差した先・・・魔力弾が落ちた場所が完全に石化していた。

「これは・・・」

「確かに自分の心配をしなきゃいけませんね・・・」

ロックと貴輔は少し顔を引きつらせる。

「まあいいじゃない。とりあえずぶっ飛ばしましょう」

その自信はどこからくるんだか。その間になんとか和らいだ私は立ち上がり、ハンドソニックを構える。

「いくよ、皆」
「「「「っしゃあ!」」」」

死闘が、始まる。

R e w r i t e 7 : 奏の記憶 前編(後書き)

京谷「どうでもいいがなんかE×ランクのやついっぱい出てこなかったか……？」

作者「仕様です……というのは冗談で、すこおー……しただけ、ネタバレすると。京谷達を出すにあたってこの展開はすでに考えてました。ツバサ・クロニクル風に言うなら”干渉させたことで道筋が変わった”みたいな」

京谷「あ、ああー……なるほど」

作者「それでは読んでくれた方に無上の感謝を。では……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6751z/>

魔法少女リリカルなのはRewrite

2011年12月23日23時48分発行